

ミルフオブスティール

# of STEEL FOREVER

フォーエバー

Don't  
meddle  
in my  
daughter!

DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

TAMAKI  
NOZOMU  
PRESENTS

TAMAKIYA

この星の未来は

身長169cm体重(秘密)の

鋼鉄の壁によって  
守られている



「うちのムスメに  
手を出すな！」  
これは2代に渡って  
その豪腕で世界を救う  
母娘スーパーヒーロイン  
エイズワンダーの  
活躍を描く

少年画報社  
ヤングコミックにて  
好評のうちで完結した  
単行本全3巻発売中の  
物語である！

CONTENTS

- 05 環望 (漫画)
- 27 タカスギコウ (イラスト)
- 28 もっちー (イラスト)
- 29 ブッチャーU (イラスト)
- 30 Gemma (小説)
- 42 チバトシロー (イラスト)
- 43 おおくぼマタギ (漫画)
- 45 ナッピー (イラスト)
- 46 迂闊十臓 (イラスト)
- 48 ICE (イラスト)
- 49 ささきタツヤ (イラスト)
- 50 アレグロ (イラスト)
- 51 琴吹かづき (イラスト)
- 52 Gemma (小説)
- 58 粉味 (漫画)
- 60 近藤ゆたか (漫画)
- 62 かのえゆうし (イラスト)
- 63 富士原昌幸 (漫画)



ふーん

# ウチムスメに 手を出すな!

草薙ゴウカ  
15歳



みたところ  
フツウの可愛い  
男の子だけどね

人事部の  
リクルーターで  
十分じゃない?

それがなかなか  
クセものでね:  
あなたのお眼鏡に  
かなうか  
確かめて欲しいの



この歳にして  
爆炎を操る  
S級能力者よ



お眼鏡ねえ...

た た た



中学卒業と同時に  
ヒーロー活動を  
開始すると  
ほのめかしているため  
幾多のヒーローチームや  
防衛組織がスカウト攻勢  
を繰り広げているわ

無論我々  
N・U・D・Eも  
例外じゃない





追っかけて！彼が  
悪の手に堕ちたら…





無事だったのね  
あの女は？

あんな雑魚

やつつけたよ



おばさん  
初代エイス  
ワンダーだろ

すごいな俺も  
そんな大物に  
見張られてるなんて

気づいてた  
のね…



誰も彼もひれ伏す  
最強の力！

金も名誉も女も  
つかみ放題！

有効活用  
しなきゃ嘘じゃん？



ヒーロー  
志願なんです  
て？

どーして  
ヒーローに  
なりたいの？



決まってる  
じゃん

力を役立てる  
ためだよ



やつつけた？  
あなたが？

こいこいおばさん

あなた  
そんな動機で  
...

おいお前ら お客だぞ

!







た...



助けて...



何をやってるの  
あなた達!

何って...  
お仕置きじゃん



こいつ俺らを  
搜おうとした  
んだぜ?

やっつけるの  
当然じゃん



ひまとして  
この子たちも

そー明日の  
ヒーローの卵  
つて奴



お互い  
スカウト攻勢に  
辟易してたから



すっかり  
気があっちゃってさ



とにかく  
やめなさい!

こんなことは  
許されないわ!

ハアアアア?



チャイミング・アイも  
決して凡庸なヴァイラン  
ではない

それがこんな  
手もなく...

いったい何があったと  
いうの...



全員が  
能力者...

でも...



功を競ったり  
見返りを求めるなんて  
もつてのほか

ましてや  
能力に驕って力を私する  
なんて...ヒーローに  
あつてはならないこと  
だわ!



どうやらあなた達  
根本から勘違い  
しているようね



正義を遂行  
したんだから  
ご褒美は  
当然だろ?

そーそー役得役得

ヒーロー  
サイコー---



えー何それ

んなの力持つてる  
イミなくね?

ツーか  
やる意味  
あんのかよ

ヒーロー  
ツマンネー

はつきし言って  
ヴィラン以外の  
選択支なくね？

わざわざ楽しくもねー  
ヒーロー選ぶ奴の  
気が知れねーよ

ヴィランだったら  
やりたい放題  
だしな

いつそ  
俺らでチーム  
組まね？

いいね  
こんなへっぽこ女送って  
くる組織よか絶対  
強い作れるよ！

いい加減に  
なさい！

それサイコー！

私がこの場で

叩き潰すわ

そんな戯言を  
本気で言っている  
のなら



…さすがは  
天下のエース  
ワンダー…

迫力  
ハンパじゃねえ

でも…



こんなとこに  
きちやダメよ



あなた

さっきパシリ  
されてた…



危ないから帰っ…





驚いたか！  
こいつも能力者  
だったんだよ！

影が薄すぎて  
忍び寄っても  
誰にも気づかれねえ



その上こいつの睡には  
猛烈な麻痺作用が  
あつて、舐められたら  
像もイチコロ

あんたといえど…





だが!

さすが  
ワンダー  
まだ動ける  
たあな



おっと



倒してやったぜ!

この俺が あの  
エイスワンダーを!

アテナ?  
どうしたの!

アテナ?



これでどうだ!



効き目が切れない  
様に念入りに舐め  
続けとけよ

見ろよ  
トロトロじゃねーか  
だらしねー顔

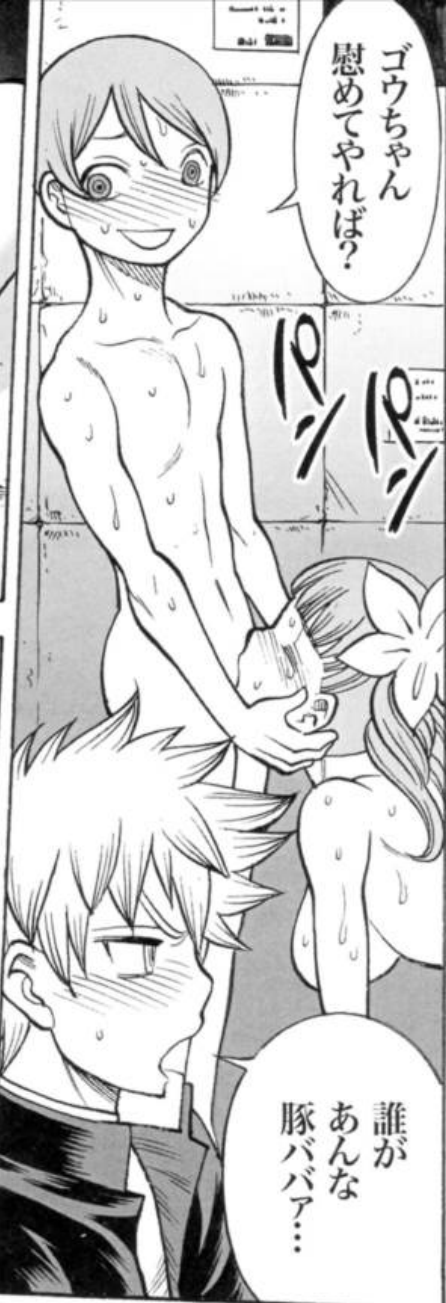


チキ

チキ  
チキ



チキチキ











干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ

干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ

んま  
んま

干ゴッ

干ゴッ  
干ゴッ

干ゴッ  
干ゴッ  
干ゴッ

干ゴッ





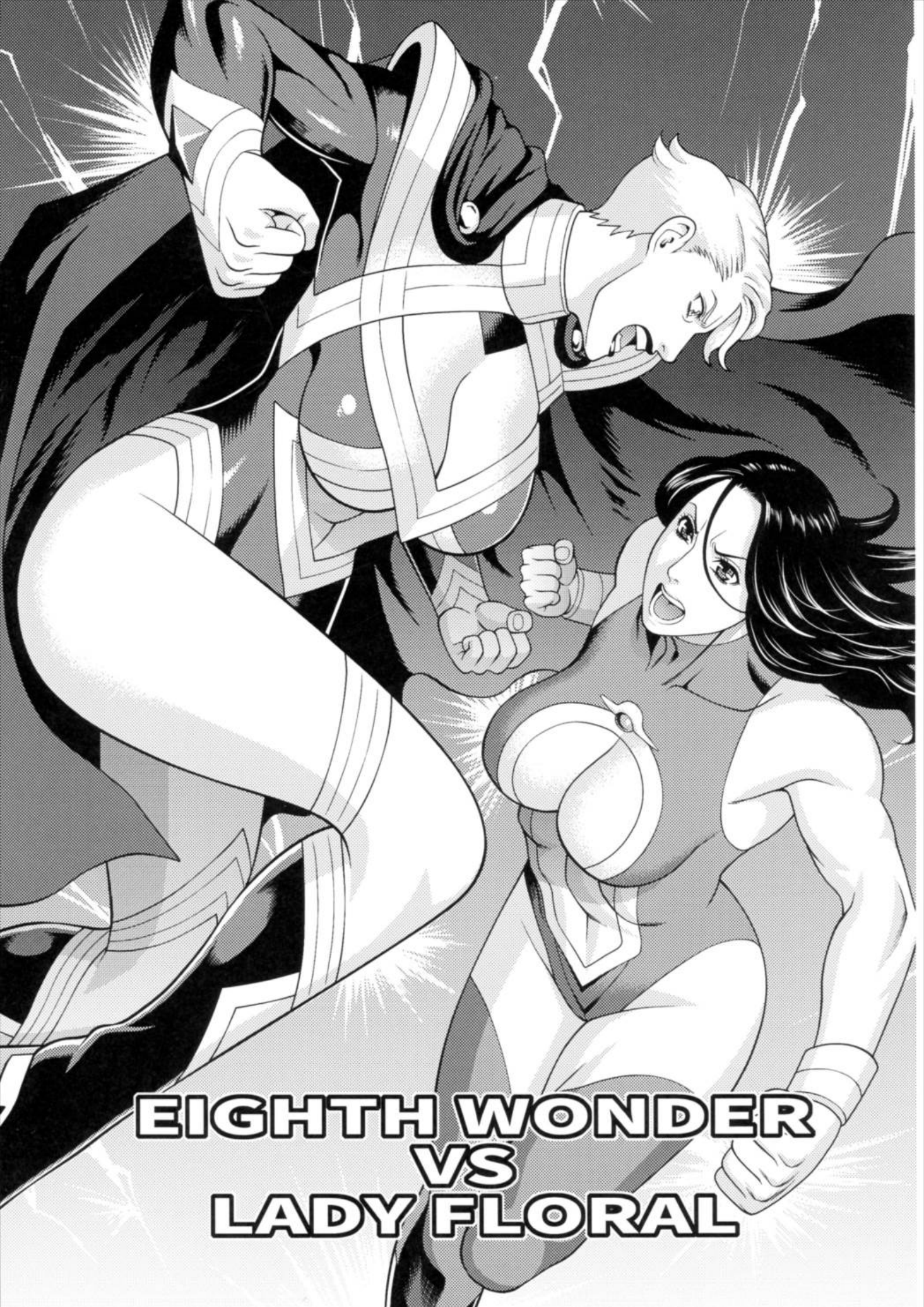












**EIGHTH WONDER  
VS  
LADY FLORAL**



「見えざる天空の島」ことハイパートピアから  
「コスチュームデザインを一新ある」との報に  
触れたアテナ。前の衣装はさすがにいい歳こいた  
おばさんにはキツイと思っての配慮かと  
喜び勇んだのもつかの間。届いた衣装は  
「クールビズ仕様」との事。  
前の衣装でありながら一り涼しげだった  
にも関わらず、アレ以上どこをどう削ると  
言うのかと思い、とりあえず着てみたアテナは…。

とが、何がもう本当にあみません。  
いつかまた、アテナ達に會える日が来る事を  
心の底から願ってます！

ドクドク...  
一体何デミス  
なんだ...



Amazing Eighth Wonder

**AROUND  
THE WORLD  
IN  
90 MINUTES**

**GEMMA**



深く澄んだピンク色に輝く結晶体を、丸っこい指先が繊細につまみ上げ、トレイの上に載せる。ハート型をしたそれを、クリップとボルトでしっかりと固定してから、白衣の男は最後にもういちど振り向いた。

「それじゃエリカ先生、始めます。こいつがうまくいけば、ミス・マーベリックの復活だ。うまくいかなかったら……まあ、少なくとももう二、三ヶ月は休業延長つてところですね」

真鍋エリカはクスリと笑ってからうなずいた。

「なるべく早くお願いしますね、剛毅さん」

彼が何ともいえない妙な顔をしたのを見て、エリカはまた小さく笑った。

お互い名前で呼びあうようになってもう一年あまりにもなるが、彼に……荒野剛毅に「エリカ先生」と呼ばれると、真鍋エリカは未だに少しむずがゆいような、くすぐったいような気持ちになる。

荒野の方も、エリカに「剛毅さん」と呼ばれるたびに妙な顔をする。ただ、それにはまた別の理由もあって、どうやら彼は、自分の名前があまり好きではないらしい。

（だって、似合わないでしょうが……）

気恥ずかしげに頭をかいて、鼻の頭を赤くしている荒野の姿を、エリカは今でも鮮明に思い出すことができる。出会って半年ほど、正式に交際を始める直前のことだった。実にその時まで荒野は、エリカに下の名前を告げようとしなかったのだ。ちなみに彼は自分の名刺にも「ドクター荒野」としか書いていない。NUDE科学局のスタッフの中にすら、彼のフルネームを知らない者は結構多い。

「ログトレース開始。スカイリンクスIIとの回線オープン」

荒野の声に、エリカは目の前の装置に目を戻した。電子顕微鏡に似たこつこつ機械の中央部に設けられた

トレイに安置された、ハート型の宝石。これこそがアクセスストーン……真鍋エリカこと、スーパーヒーロー・ミス・マーベリックの力の鍵である。いや、であった、と言うべきかもしれない。トレイに置かれたその宝石の中央には、斜めに一条、大きな亀裂が走っている。

荒野の指がスイッチに触れると、アクセスストーンの数センチ上に据えられたレンズから、一条のレーザー光線が注がれはじめた。

数ヶ月前、突如現れた謎の巨大ミュータント、グレンデル。そのあまりにも凶猛な力の前に、世界最強のヒーロー・スターゲイザーすらも重傷を負い、ミス・マーベリックもまた、アクセスストーンを破壊されてしまった（※see LILYTRIGGER #14）。戦う力を失った二人ではあったが、少しでも誰かの力になりたいと、国連直属のグレンデル討伐チーム「MIX」の指導役を務めることとなった。

副司令としてスターゲイザーを支え、MIXの子供達（そう、英国の切り札として勇名高い超人チームMIXは、なんとハイスクールも出ていないような子供達のチームだったのだ！）を教え導く日々は、苦勞が多いが充実している。しかし、子供達ばかりを危険な戦場に送り出し、自らは後方で指揮を執ることには、どうしてもある種の後ろめたさを感じずにはいられない。端的に言えば彼女らは、自分が勝てなかった相手に人の子供をぶつけようとしているのだ。

そんな折、日本の荒野から、アクセスストーン修復についての連絡が入った。一も二もなくエリカは休暇を取り、三枝市へ飛んで帰ってきて今に至るのである。

「前にも言いましたが、今回の修復ではシステム全体を、スカイリンクスからエネルギーを取る方式に戻します。デメリットもありますが、やはり使える

エネルギーの量が違う。パワーアップの必要や、今後の拡張性も考えると、こちらの方がいい」

「ええ。でも、よくサエグサ・インダストリーが協力してくれましたね？ 私が壊しちゃったスカイリンクスをもう一度飛ばすのだって、たいへんなお金がかかったでしょうに」

「いっぺん解体されて再建してから、あの会社もずいぶん真つ当になりましたよ。それに、この前グレンデルが日本に来た時、三枝も大分やられましたからね。他人事ではないでしょう」

荒野の指が装置のダイヤルをほんのわずか回すと、レーザーが同じくらいほんのわずかに太さを増し、同時に装置のディスプレイに新たな数字と文字の列がわつと流れ出す。エリカにはさっぱり意味が分からないが、荒野は遊び場を前にした子供のようなキラキラした目でディスプレイの数字を追いかけている。

「いやあ、本格的にいじるのは久しぶりだから、緊張するなあ」

「その割には、楽しそうに見えますけど」

「緊張するってことは楽しいってことですよ」

「もう……シンクロ認証の方は、どうですか？」

「それも今手を加ええます。認証システムにある程度幅を持たせておかないと、以前のように変身できるのがエリカ先生だけになっちゃいますからね」

アクセスストーンはこの三枝市の全エネルギーをまかなっている発電衛星スカイリンクスIIにアクセスし、そこから膨大なエネルギーを引き出して、ミス・マーベリックの全身を覆うアームドスキンを形成する。ただし、誰にでもそれができるわけではない。アクセスストーンは一種の疑似生体ともいえる性質を持っており、ストーンを起動できるか、起動できたとしてスカイリンクスからどれだけのエネルギーを引き出せるかは、起動した持ち主の生体波動がアクセスストーンとどの程度シンクロするか

かかっている。

「もともとはセキュリティとしてこういう構造にしておいたんですけどね。生体波動は指紋や虹彩よりずつと変えにくいから。ただ、まったく想定外だったのは、認証システムをロバストにしすぎたせいで一種の自律性を獲得しちゃいまして、言わばアクセスストーン自体が持ち主を選ぶような状態になってしまった。まあ、そのおかげでエリカ先生という最高の適合者に出会えたわけですから、結果的には成功だったわけですが、システムとしては改良しなきゃとずつと思つてたんですよ」

いくつかコマンドを入れては、結果を表示するディスプレイを睨みつけるといふ作業を繰り返しながら、荒野はとめどなく喋り続ける。もう何度も聞いた説明ではあるが、荒野にとっては喋り続けることが実験をスムーズに進めるための潤滑剤だと知っているエリカは、口を挟まず黙って聞いていた。

認証システムをもっと拡張できれば、彼女の助手を務めてくれるマーベルドールズの三人にも、スカイリンクスIIのエネルギーを使った新たなアクセスストーンを用意することができる。生来内気で戦いなど好まず、マーベリック・チームの戦力強化にも消極的だったエリカだが、自分が不在の間、三枝市を守っている彼女達のことを思えば、今回の改修にはなおさら力が入る。

「まずは双方のセキュリティを一旦フリーにして、新しい認証システムを調整しつつ組み込んでいきます。ドアの鍵を一度引っこ抜いて、新しいのを取り付けるようなイメージですな」

ハート型の中央にまっすぐ突き刺さるレーザー光が、少しずつ太さを増していく、それにつれて、白かった光がアクセスストーンに染められるようにピンク色を帯びていく。その光が親指ほどの太さになったところで、突如ラボの中が真っ暗になった。

「何!？」

咄嗟に頭を下げ、周囲の机や棚を手で確かめる。荒野のいたあたりからガチャガチャと物音が聞こえるのは、おそらく荒野も同様になっているのだろう。いや、それにしても長すぎる。荒野はそんなに落ち着きのない人間ではない。どちらかというと、あの音はまるで……

漠とした不安を覚えたエリカが思わず立ち上がった時、ちょうど照明が戻った。エリカの目に真っ先に映ったのは、同じように立ち上がり、呆然としている荒野の横顔だった。

「馬鹿な………なんてことだ……」

荒野の視線の先に目を向ける。解析装置のトレイが、空っぽになっていた。

「機嫌めつちや悪そうね、クララ」

「あのね、今日で中間テストが終わったの」エイスワンダー・遙クララは、マツハ二十で飛びながら不愉快さを隠そうともしなかった。「二週間ぶりに遊べると思った、その日の午後に出動させられてみよ。誰だってこんな顔になるよ!」

「仕方ないでしょ、ミス・マーベリックの変身アイテムが盗まれたんだよ。大事件じゃない」リサが指摘すると、クララはますますふくれっ面になった。

「わかつてるよ! だからこうして飛んできたんじゃない。こんな北の果てまでさ」

「涼しくていいじゃないの。東京は暑いし」

クララが飛んでいるのはオホーツク海上空、そろそろカムチャッカ半島が見えてこようかというあたりである。サボートとして、クララの友人であり、先日デビューしたばかりの新人ヒーロートリオでもあるリサ・キサラ・ジュンの「フェーリアス・スリー」が、高速飛行艇ストリップステージ号で後方から追隨していた。

「で、犯人は誰なの? マジ緊急で来たから、なんにも聞いてないんだけど」

「今追ってるのはフアートクロウラー。能力は……うえ」個人データを開いたジュンが顔をしかめた。「おならをするたびに短距離テレポートする能力だつて」

「何それ!」クララは呆れた声を上げた。「三枝市のN U D E支部はそんなのに大事なアクセスストーンを盗まれたわけ!？」

「いくらなんでも、そこまで間抜けじゃないわ。フアートクロウラーはただの運び屋で、主犯は別にいるはずよ」

クララの襟元の通信機から、ハンナの声が流れてきた。

「面目ありません」別のチャンネルから、申し訳なさそうな男性の声が謝る。ドクター荒野は盗難以来支部のラボに詰め切りで、アクセスストーンの探知と奪還の手段を探しているらしかった。

飛び続けるクララの前方に、何やらチラチラする小さな点が見えてきた。目をこらしつつ速度を上げると、点は黄色い全身タイツを着た小太りの男性に変わる。背中にジェットパックを背負っており、ぱつと姿を消しては少しに出現するのを一、二秒ごとにめまぐるしく繰り返している。どうやらジェットパックと短距離テレポートを併用することで超高速移動しているらしい。

「ねえ、あれもしかして一秒ごとにおならしてるってこと? 何食べたらそんなことできるの?」

「それより、私あの辺飛ぶのイヤなんだけど」

「ごちゃごちゃ言つてないでさつさと捕まえる!」ハンナの叱咤でクララとストリップステージ号は速度を上げる。間違っても彼の残り香を吸ってしまわないように上方から接近していくと、途中で気配に気づいたらしく、にきびだらけの脂ぎった顔が上を向いて憎々しげな表情を浮かべた。

「もう逃げられないわよ。おとなしくアクセスストーンを返しなさい！」

フューリアス・リサがジェットバックを装備して飛び出すと、一瞬でその姿が何十人にも分裂し、ファートクロウラーの行く手を遮る。続いて飛び出したフューリアス・キサラの姿がぼやけて拡散し、スーツの色と同じ薄緑色の雲となってその外側を包み込む。あつという間にファートクロウラーは、無数のリサと緑色の雲に包囲されてしまった。

ドクター荒野が開発した、着用者の深層自己イメージに合わせて肉体の物理構造を変化させる特殊アームドスキン「フューリアス・モディファイアー」の力である。この新装備の実験台を買って出ること、リサ達は一足早く本職のヒーローとしてデビューすることができたのだ。

「フン、このボクを甘く見るなでブー」

リサの分身とキサラの雲がじりじりと包囲の輪を狭めていくと、不意に通信機のアラームが鳴った。  
「すみません！ 報告し忘れていたことがあります！」

ドクター荒野の声だ。ひどく焦っている。

「アクセスストーンは実験中で、認証システムを一時的にフリー状態にしてあるんです」

「それって、どういう意味？」 漠然といやな予感を覚えつつ、クララは問い返す。

「つまり……今のアクセスストーンは、誰にでも使えるってことです」

ハッと顔を上げると、ファートクロウラーが手にした焼き芋を放り出し、代わりに奪ったアクセスストーンを高々と掲げていた。

「ちよっ、待」

「アクセス！」

《スカイリンクス、アブローチ》

一条の光線が空から降り注ぎ、アクセスストーン

を貫く。目もくらむような閃光が消えた後、そこにいたのはアームドスキンを身にまとったファートクロウラーであった。顔中にそばかすの浮いた脂ぎったデブが、ハート型をあちこちにあらったアームドスキンを身にまといている姿は、控えめに言っても見苦しかったが、本人はそんなことを気にする様子はなかった。

「えー……」  
「あれと戦うの？」  
「帰っちやダメですか？」  
「ダメに決まってるでしょうが」ハンナの容赦ない声が響く。(あんなナリでも、相手はミス・マーベリックのアームドスキンよ)

「あんなナリでもミス・マーベリックなんですよ」キサラが面倒くさそうに言った。「私達じゃ相手になりませんよ。やつぱりエイスワンダーくらいでないと」  
「あ、ずっこい！ 人に押しつけようとして！」  
「その心配はないかもしれません」またしてもドクター荒野が割って入った。(生態波動はスカイリンクス側でも参照していて、パワーゲートの流量が……えーつまり、誰が変身するにせよ、本物ほどのパワーはないはずです)

「うげえ」  
仕方ない、といった体で、まずはリサとその分身が一斉に襲いかかる。だがファートクロウラー……否、ファートクロウラー・マーベリックは、目にも止まらぬ動きで分身達の攻撃をすべてかわす。雲になったキサラが凝縮し、水の塊となって太った体を押し包むが、ファートクロウラーが両腕を振り回すとあつけなく飛沫になって飛び散ってしまった。

「ブフフフ無敵！ 無敵でブー！ ボクを止められる者は誰もいないのでブー！」  
「調子に乗るんじゃないっ！」

クララの跳び蹴りが側頭部に炸裂し、ファートクロウラーはひっくり返る。だが回転しながら一発放屁し、瞬時に上空に転移して体制を立て直す。

「この！」  
後方に控えていたフューリアス・ジュンが両手を振り上げると、その腕がバネのように伸びてファートクロウラーの足を捕らえる。そのまま引つ張り下ろしたところへ、今度こそリサの分身パンチが決まった。

「デブー！」  
「わざと？ ねえそれわざと!？」

再度のテレポートの隙を与えず、フューリアス・スリーとクララがたたみかける。アームドスキンは確かに強力だったが、ドクター荒野の言う通り本物のミス・マーベリックのそれには遠く及ばない。おまけにこちらにはエイスワンダーがいるのである。善戦はできても、勝負がつくのは時間の問題だった。

「くそっ、あきらめないでブー！」

リサの一撃を辛うじてかわしたファートクロウラーは脂汗をにじませ、ブツと一発放屁してクララたちから距離をとると、息を大きく吸い込んでから、襟元で輝くアクセスストーンをむしり取った。

「……あっ！ やばい！」

キサラが最初に気づいたが、もう遅かった。ファートクロウラーはニヤリと笑うと、握ったアクセスストーンを尻にあてがい、高らかに一発屁を放つ。次の瞬間、エイスワンダーの鉄拳がその頬に命中し、さらに次の瞬間リンクを失ったアームドスキンが分解消滅して、デブが一人真つ逆さまに青い海へと落ちていった。彼が海面に激突するまでの数秒間、クララ達は誰が助けに行くかについて真剣な討議を行い、結局じゃんけんに負けたキサラが寸前で彼をすくい上げた。

「アクセスストーンはどうなった？ 探しなさい」



い！)

「探せつたって……」

クララは見渡す限り広がる寒々とした海原を眺めて途方に暮れた。

「ファートクロウラーのテレポトガスは、小さなものなら数キロメートルの転移が可能だって……。ここペーリング海だよ？ どうすればいいの、こんな」

ストリップステージ号に戻って情報を呼び出したジュンが頭を抱える。

（いくらファートクロウラーが大バカ野郎だとしても、せつかくの戦利品を何の当てもなしにテレポトで飛ばすわけがない。間違いなく、誰かに受け渡す意図があったはずよ）

当のファートクロウラーは、クララのパンチを食らってきれいに失神している。リサが気付けを試みているが、目を覚ます気配はない。

仕方なく、クララは空中に不審なものがないか探し、リサとジュンはポトで海面を、キサラは液化して海中を搜索してみる。十五分ほど空しい搜索を続けた頃、襟元の通信機がアラートを発した。

（N U D E 北米支部より報告！ アラスカ・ポトヘイデンで、アームドスキンを使用したヴィランが暴れています！）

ヴァルチャーことアリストア・ヴァーナーは上機嫌だった。長年喉から手が出るほど欲しかったミス・マーベリックの力の源が、こうして我が手にあるのみならず、その力を使ってこうして変身することまでできる。瘦せさらばえてたんだ体に、あちこち色素斑の浮き出た禿頭の老人が、白とピンクのアームドスキンを身にまとっている姿は控えめに言っておぞましかつたが、当人はそんなことはまったく気にしていない。

枯れ木のような手足を振り回すと、するどく空を切る音がする。体をすこし傾けるだけで、風のような速度で移動できる。二十代の頃ですら、身体能力には劣等感しか持っていなかった自分が、今や地球上のあらゆる人類を凌駕する強さを手に入れたのだ。この計画に費やした時間と資金は決して小さくないが、惜しいとは思わなかった。

「いやはや、自分の体を動かして事をなすなどというのは下民のすることと思っておったが、なんのなんの馬鹿にしたものでもないな。今後はひとつ、パワードスーツとやらの開発にも本腰を入れてみるかのう」

「勝手なこと言ってるんじゃない、この泥棒！」

一条の光線が目の前にひらめき、ヴァルチャーは空を見上げた。ハゲタカのような顔を覆うハート型のバイザーに、陽光を跳ね返して鮮やかにひるがえる青いマントが映る。

「あの短時間で、こんな遠くまで運ばれたなんて思わなかったわよ。今度こそそれ、返してもらおうからね！」

ヴァルチャーはニタリと笑って手を上げる。

「アームドスキンの実地テストには願ってもない相手よ。どれ、ヴァルチャー・マーベリックが一つ遊んでやろうかい」

背中に背負った大きなケージの蓋が開き、銀色の翼を持つ機械の鳥が二羽、三羽と飛び出してきて、一斉にクララに襲いかかった。

「アリストア・ヴァーナー、コードネーム・ヴァルチャー。もと大手機械メーカーのエンジニアで、ハゲタカ型の自律飛行ドローンを大量に操る。だつてさクララ」

ストリップステージ号がようやく追いついた時、クララはまさしく銀色に輝く無数のハゲタカ型ドローンに囲まれていた。一羽一羽は大した強さではな

いのだが、とにかく素早い上に数が多く、それぞれが一撃離脱戦法で入れ替わり立ち替わり攻撃をかけてくるため、気を散らされてまともに戦えない。おまけに、やつと鳥どもを追い散らして本体のヴァルチャーを攻撃しても、アームドスキンの力にてこずっているうちに、すぐまたドローンが体勢を立て直してしまふ。

「見たらわかるよ、そんなこと！ 弱点とかは書いてないの？」

「本人の戦闘力は低いって」

「でしようね！ 今それめつちや無駄な情報だけだね！」

リサとキサラが再びジェットバックを背負って飛び出す。ファートクロウラー相手には今一つ見せ場を作れなかったが、こういう数で勝負してくる敵は二人の得意とするところである。無数の分身があつという間に数十羽のドローンを叩き壊し、残ったドローンもキサラの液体に包まれると思うように飛ばせず、次々に仕留められていく。

「ええい、敬老精神のない奴らめ！」

言い捨てて逃走に移るヴァルチャーを、ようやくドローンから解放されたクララが追う。スピードもなかなかのものだったが、やはりミス・マーベリック本人には及ばない。数分とかならず追いつき、尻にワンダービジョンをお見舞いすると、老人は耳障りな悲鳴を上げて跳び上がった。なおもしばらく飛びながら戦う二人であったが、ドローン軍団を失ったヴァルチャーに、もはや勝ち目はなかった。

だが、クララが最後の一撃を決める寸前、背中のケージに最後まで待機していたらしいドローンが突如猛然と飛び出し、ヴァルチャーの首筋をかすめて飛び去る。上空へ舞い上がり、クチバシにくわえた何かをゴクリと飲み込むと、尻のロケットエンジンに点火し、あつという間に姿を消した。

「まさか！」

ドローンの行方を目で追ったクララがハッと気づいて振り返ると、ヴァルチャーの体を覆うアームドスキンがゆっくりと分解しつつあった。

「あーっ！ またやられたー！」

（落ち着け、クララ！）ハンナの声が通信機から響く。（ジュン、クララをモニターしてるわね？ ドロームはどっちへ飛んでった？）

「えっと…南東ですね」

（やっぱりか…）通信機の向こうで舌打ちをするのが聞こえた。

（クララはさっきのドローンを全速力で追って。フューリアス・スリーはヴァルチャーを確保して、そのまま帰投）

「えーっ！ いいなー」

（あんたは急ぎなさい！ 追いつかなかつたらただじゃおかないよ！）

ハンナに叱咤され、クララは慌ててドローンの逃げた南西へ飛び始める。

だが、すぐに追いつくかと思いきや、クララが全力で飛んでも、はるか彼方にビンの先のように見える銀色のドローンはなかなか近づいてこなかった。

今のクララの全速力は、母親の全盛期の最高速度をわずかに上回る。その彼女が追いつけないのだから、あのハゲタカもどきはマツハ二五近い速度を出していることになる。

「生意気ーっ！」

ムキになったクララは、眼下にアメリカ西海岸が矢のように飛び去ってゆくのにも目をくれず、一心に逃げるドローンを追う。だが、しばらく追跡したところで、そのドローンがいきなり爆発した。

「えっ!?」

面食らったクララが爆発した位置まで来て静止すると、わずかに金属臭い煙のほかには何も無い。呆然として周囲を見回して、そこが都市の上空であることによりやく気がついた。地理の成績はよくない

のでどのあたりかよくわからないが、飛行時間からして一千キロかそれ以上移動したはずだ。たぶんカナダの南端か、アメリカの北端か、そのへんだらう。

と、

「これはこれは、エイズワンダー。はるばるシアトルまでよく来たね！」

声と共に、何かが下から物凄い勢いでぶち当たってきた。空中でひっくり返ったクララが慌てて体勢を立て直すと、もはや見慣れた白とピンクとハートのマーク。ミス・マーベリックのコスチュームだ。

だが、今度はそれを身にまとっているのは筋肉質の女であった。エラの張った獰猛な顔つきに、猫のような細い目がキラリと残忍な輝きを放つ。

「このカンフーパーンサー・マーベリックがお相手しようか！ ついてきな！」

「カンフーパーンサー、本名アニタ・バスケス。中国人の秘密結社に仕込まれた暗殺拳法の使い手で、主な前科は詐欺と強盗。…どう思う、ドクター」

モニタの向こうのドクター荒野は鼻の頭の汗をぬぐい、眼鏡の位置を直した。

（どう考えても、主犯格とは思えませぬね）

「同感ね。こいつはただの三下で、こんな計画を立てる頭も実行する力もない。黒幕は別にいて、まだ身を潜めている」

ハンナは眼帯をした方の目を押さえた。NUDEのラボに侵入するスキルと、複数のヴィランを世界規模で連携させるコネクションを持ち、アクセストーンを欲しがっている者。そんなヴィランはそう多くはいない。

（もう一つ、確実にあった点があります。アクセストーンを奪った連中は、スカイリンクスIIを追って移動している。そのルート上のどこかに、今回の首謀者がいるはずですよ）

メインモニタの世界地図に、スカイリンクスIIの

軌道が重ねて表示される。ヴィラン達がアクセストーンを起動した地点は、確かに衛星の軌道を追うように東へ移動していた。

「不十分なアームドスキンでも、そこらの航空機よりずっと速く移動できる。おまけにそこらのヒーローには負けにくいぐらいのパワーもある。お宝であると同時に輸送手段であり、護衛でもあるってわけね。上手いことやってくれるわ」

（しかし、ルートが予測できるといふことでもありません。マツハ二五相当の速度で逃げ続ける相手を追いつけるのは簡単ではありませんが…）

「まあ、別に追いかけるばかりが方法じゃないわ」ハンナは髪をかき上げて唇に笑みを浮かべた。

「応援を手配した。とびきりの奴をね」

「イツツ・アナキー！ 体制の手先なんかには負けねえのさベイビー！」

サンフランシスコでアンソニーシャルズが改造人間アンチガバメントと。

「ギガギギギ、最新のテクノロジーはこのワシがいただく！」

アマゾンのジャングルのただ中で古代怪人イレブンフェイスと。

「その白い太ももにブチュカミの烙印を押してやるぜー！」

大西洋でイカ人間マンスクイードと。

エイズワンダーは戦って、追って、戦い続けている。た。

「もうやだよー！ いい加減にしてよー！」

（頑張ってるなら手伝ってよー！）クララは通信機に向かって叫ぶ。

（無茶言うな。あんたが全速力で飛ばないと追いつけないのに、私らが付いてけるわけないだろ）キサ

ラの香気な声が答える。

「ほらあれ、助っ人を手配したって司令も言ってたし」とジョン。

「大体、アクセストーンを取り逃がさなけりや済む話なんでしょうが」

「そうだけども！ 簡単に言わないでよ！」

次々に出現してはアームドスキンをまとうヴィラン達は、ファートクローラーやヴァルチャー同様、個々の戦闘力としてはクララが対処できないような相手ではなかった。ただ、彼らがいよいよという時にアクセストーンを次の相手に受け渡す、その手筈だけは毎回やけに周到にとのえられており、ためにクララはこうして延々追い続ける羽目になっているのだ。

「また出たよ、クララ！ 今度は南アフリカで、ペトロールメンが暴れてるって！」

「またー!?」

だが、はるばる大西洋を渡って南アフリカの首都ケープタウンに到着したクララが目にしたのは、交差点の真ん中に広がるドロドロのタールの沼——地底に根城をもつ重油人間ペトロールメン達が、完全に叩きのめされるとそういう状態になる——と、その真ん中に立つ人影だった。

灰色がかったブラチナプロンドのツインテールと、クールだがどこかにあどけなさの残る眼差し。小柄な肢体をつつむ赤と黒のコスチューム。

「リリイ！」

「久しぶり、クララ」

かつての英国諜報部、今は国連安全保障理事会の誇る超人チーム、M.I.Xのリリイ・トゥリガーはタールの山を蹴り、クララのいる上空までひらりと舞い上がってきた。

「えー、ほんと久しぶりー！ 助っ人ってリリイだったんだ！ 助かるう」リリイに飛びついてはしゃ

ぐクララ。昨年、M.I.Xが研修で日本に来た際に知り合ってから、人形のように華奢で可愛らしいリリイはクララの……というか、遥母娘の大のお気に入りである。

「あ、でもリリイ達っていま、例のグレンデル事件の専任チームなんですよ？ こっち来てくれていいの？」

「エリカ先生……ミス・マーベリックのことなら、こつちにも無関係じゃないし。臨時で派遣された」抱きすくめられたまま、クララの胸の間からやつと顔だけ出してクララが答える。「ケント達だけじゃ不安だから、早く片付けて戻りたい」

「聞こえてるぞ」クララの腕の通信機から、不機嫌そうなケント……スピーディ・ワンダーの声が聞こえてくる。

「ま、いいわ！ 助かっちゃった。それで、アクセストーンは？」

「……」リリイはうつむいて黙ってしまう。クララ

の笑顔がこわばった。

「まさか」

「逃げられた。ごめん」

リリイは済まなそうに、こつくりとうなずく。「奴ら、逃走用に一人待機させてた。今頃たぶん、海底パイプを通ってインド洋へ向かってるはず」

「うわー……」

クララは天を仰いだ。諜報員としての訓練を受けているリリイすら出し抜くような相手を、クララが捕まえることなどできるのだろうか。

「ここからは、私も手伝うから、頑張ろ」クララの落ち込みを察したのか、リリイがマントの裾を引っ張る。「とりあえず、追わないと」

「そだね……」クララも気を取り直す。リリイの手を握ると、二人の体がふわりと舞い上がる。北東の方角へ視線を据えると、二人は一瞬でケープタウン

上空から姿を消した。

「わっはー！ 速い速い！」

リリイ・トゥリガーの能力は、超感応により相手の力を限界以上に引き出し、かつ操作できるという極めて強力なものである。エイズワンダーの力は強大すぎるためか、あるいは普通の超人と性質が違うのか、リリイにも完全に操ることはできないが、それでもリリイと一緒にいると普段の何割増しかの速度を出すことができる。ほとんど一瞬でアフリカ大陸を縦断し、サハラ砂漠が見えてきた。

「クララ、これ。目を通しておいて」

手を繋いだまま、クララに引張られるようにして飛んでいるリリイが、風圧で飛ばされないように注意してタブレット端末を渡してきた。

「何これ？」

「ブレインストームが洗い出した、今回の事件の首謀者候補リスト。上から順に有力」

「えっ！ こんなあつたんだ。さっすがあ」

「けっこう前にハンナ司令にも送ったけど。見てないの？」

「見てない……。ハイ・デベロップーズ、ドクター・レグザリア、SSC、クイーンジェネシス、アブデイクイター……知らない名前もあるなあ。SSCって、SI社のなんかだっけ」

「サエグサ・シークレット・コーズ。旧サエグサの軍事部門の残党で、今もドクター荒野の技術を狙ってる」

「クイーンジェネシスって？」

「機械を乗っ取る電子生命体。NUDE支部への侵入は一番できそう」

「アブデイクイターは？」

「どっかの星のもと皇帝で、人間を駒にしてチェスをやるうとしてるクソ野郎……。あのさ、普段ヴィランの情報入れたりしないの？」

「い、いやいやいや！」リリイが呆れ顔になったのを見てクララは慌てて首を振る。「ほら私、実践で何とかするタイプだから！ 座学は重視しない派っていうか、その」

「……勉強は大事だよ」

年下の少女から妙にしみじみした顔でそんな言葉をかけられ、クララはなんだか心底情けない気分になってしまった。思わずスピードも落ちかけたのを、ふんばって立て直す。ちょうどそのタイミングで、襟の通信機がまた鳴った。

（ソマリア近海でアクセスストーンの起動を確認！ 急いで向かって！）

「ムホホホホ、この我が輩が貴君らを解剖して進ぜよう！」

モガディシオ沖で獣頭のマッドサイエンティスト・ドクターキマイラと。

「何もかも炎の中で清められるのよ。アタシも、お前達も、ミス・マーベリックも」

スリランカで悪のミュータント・アグナイアと。 「終幕という名の救いを与えてやろう！」

マカオで宗教結社ターミナルズのリビングカタストロフと。

クララとリリイは戦って、追って、戦い続けた。 「もーやだつてばー！」

二人になった分、戦いは手早く片付けられるようになったが、それでも肝心のアクセスストーンを奪い返そうとすると、毎回毎回すんでのところで逃げられてしまうのだ。

「……くそ」リリイも苛立ちを隠そうとしなかった。 「あいつら、何かおかし。戦うのが目的じゃないみたい」

「実際そうでしょ。あいつらはあくまで運び屋なんだから」クララが額の汗を拭って答える。

「そうだけど……」

一方、日本にも苛立ちを隠せない者達がいた。 「おかしいわ。このままじゃあいつら、日本に戻ってくることになる。地球を一周して、結局何がしたかったの？」

（それなんです……）

この一時間半というものの繋げっぱなしのモニタの向こうで、ドクター荒野が青ざめた顔をしているのに気付いたハンナは無言で先をうながす。

（……我々は、敵の目的について大きな勘違いをしていたかも知れません）

「勘違い」ハンナの片目がすつと細まる。

（まだ確証はありません。ですが、次の受け取り手はおそらく日本にいるはず。何とかして、そいつがアクセスストーンを起動する前に捕まえて下さい）

「そりゃあ、こつちだってそうしたいけど……」

ハンナが髪をかき上げた途端、司令室にオペレーターの声が響く。

「K県上空でアクセスストーン起動反応！」

「……すまん、ドクター。やっぱり無理だったみたい」

「ウハハハハハ、俺の愛は 그리스！ 俺の愛は電子！ この俺の愛を受けて機械達は強くなるのだあ！」

「何あれ、キモい」

全身銀色の体に電子回路を埋め込んだような、奇怪な姿の男がアームドスキンを身につけて高笑いしている姿を見て、最初にリリイがもらした言葉がそれだった。クララも同感だ。

「メカノフィリアン。その名の通り、機械を変態的に愛する変態よ」

心底イヤそうに解説を加える、ミス・マーベリック

クによく似たアームドスキンをまとった少女は如月椿。コードネーム・カメリア。ミス・マーベリックに代わってこの町を守るサイドキックチーム「マーベルドールズ」のリーダーだ。アリッサムこと仙道真冬、ベイビープレスこと八巻香須美もいる。三枝市から始まった追走劇は、地球を一周して再びこの三枝市に戻ってきたのである。

「ニホンには変態のヴィランしかいないの？」

「失礼な！ ……まあ、なぜかそういう連中が多いのは否定しないけど」

（くだらない話しないで早く行く！）ハンナの声が響く。

（今度こそ、何が何でも捕まえなさい。そろそろヤバイことになりそうよ）

「ヤバイことつて？」

答えは返ってこなかった。だが、ハンナ司令はハツタリで人を動かすような人物ではないとクララは知っている。

「リリイ、みんな行くよ。今度の今度こそ取り戻そう」

「ん」

小さくうなずいたりリリイと共に、クララは空を蹴って飛び出す。

「メカノフィリアン！ あんたの好きにはさせない！」

「ぬうっ！ 愛の邪魔者め！」

戦いは一方的であった。メカノフィリアンは手で触れた機械の性能を強化するという能力を持ち、本人もそこそこに格闘技の心得がある。ここまで何人も戦ってきたアームドスキン装着者達の中ではどちらかといえは手強い部類と言えたが、いい加減アームドスキンとも戦い慣れてきたクララとリリイに、正規のアームドスキンを駆るマーベルドールズを加えた五人の敵ではなかった。ものの数分でメカノフ

イリアンの顔には疲労と焦りの色が見え始め、一瞬できた隙を逃さず伸ばしたクララの手が、マフラーに輝くハート型の宝石を今度こそ掴み取った。

「やったあ！」

アクセスストーンを奪われたアームドスキンがゆつくりと分解を始める。完全に分解するのを待たず、カメラリア達三人がメカノフィリアンを押し倒して腕を逆さにねじり上げた。

「何とかなかったか……」

モニタで見ていたハンナも安堵の息をつく。

だが、戦いの現場から数キロも離れていないNUDE支部のラボで、分析を続けるドクター荒野の顔には脂汗がびっしりと浮かび、その表情は安堵とはほど遠かった。

「何ということだ……」

もじやもじやの髪を太い指がかき回す。後ろに付き添っていたエリカが、声をかけようとしたその時、強烈なノイズと共に室内のモニタが一斉にブラックアウトした。

「え？」

強烈な電磁パルスで、無線通信が遮断されたのだ。荒野とエリカは一瞬顔を見合わせ、すぐにラボの外へ飛び出した。

「やっとなかった。彼らの目的は、アクセスストーンを持って逃げおさせることじゃなかったんです」走りながら、小脇に抱えたノートパソコンを何とか復旧させようと苦闘しつつ、荒野が言う。

「本当の目的は、アクセスストーンを起動することだった。短時間の間に何度も何度も起動して、スカイリンクスIIに繰り返しアクセスするのが狙いだったんです」

「繰り返しアクセスすると、どうなるんです？」

エリカは荒野の前に回り、前をろくに見ずに走る彼のために先導役を務める。電磁パルスで破壊された機器もあるらしく、支部の廊下にはNUDEの

タツフ達が右往左往していた。それをかき分けて、エリカ達は出口を目指す。

「解析です。このすべてを仕組んだ誰かは、アクセスストーンの起動プロセスをずっと監視していた。スカイリンクスIIへの侵入の仕方を探っていたんだ」

「それは、つまり……」非常口を押し開け、駐車場へ走り出す。クララ達の元へ行かなくてはならない。何が出来るかはわからないが、とにかく現場へ向かわなくては。車のシートへ収まるのと同時に、荒野が吐き出すように最後の言葉を口にした。

「スカイリンクスIIを、乗っ取るためです」

その影に最初に気付いたのは、アリッササムだった。遙か空の上に、ほんやりと薄紫色がかった何かの影がある。その影がだんだん大きくなる。

風が吹いてきた。空から下って大地を吹き払うような、異様な風だ。クララ達もようやく気付いて空を見上げる。エイスワンダーの視力が、はるか上空から落下してくる巨大な円筒形の物体をとらえた。

円筒の中ほどから、長方形の細長い板が四枚伸びている。それが人工衛星の太陽電池パネルだ、と気付くと同時に、そのパネルが歪み、変形し、まるで翼のように見える何かへと代わった。円筒形の中央がくびれ、両端から二本ずつの突起が伸びる。突起はよじれるように姿を変え、人の手足に似たものになる。背中に黒い翼を備えた、女の手足に。

その頃にはクララ達だけでなく、地上にいる誰もがその影に気付いていた。不安げなざわめきと、いくつもの悲鳴が上がる。巨大な何か、この三枝市をめぐって落下してきているのだと、誰もが気付いてパニックになるのに、それほど時間はかからなかった。

それに追い打ちをかけるように、天から割れるような声が降って来た。

『ハッハハハハハハハ！ ありがとうよ、お前達！ このクイーンジェネシスの手伝いをしてくれて！』

その数秒後、それは三枝市に落下した。ビルほどの大きさのある、チタンの爪とカーボンファイバーの髪、太陽電池パネルの翼を持つ女……スカイリンクスIIの成れの果て、電子生命体クイーンジェネシスの新たなボディが。

「迂闊でした」エリカの運転する車の助手席で、荒野はさつきからそう繰り返していた。

「クイーンジェネシスは当初から、ブレインストームの挙げてくれた容疑者リストに入っていたんです。ただ、アクセスストーンは人間でなければ使えない。その一点で、リストから除外してしまっただけ。僕のミスです」

「あまり自分を責めないで下さい」事故を起こさないギリギリの速度でかつ飛ばしながら、エリカが答えた。普段は制限速度をきっちり守るのが信条だが、今はそんなことを言っていられない。現場から避難する車の流れで対向車線は大混雑していたが、エリカ達と同じ方向に向かう車はほとんどない。おかげで思う存分スピードを出せる。

「奴はスカイリンクスIIのエネルギーをすべて自分のものにしてている。単純に考えて、ミス・マーベリックの数倍のパワーを持っていることになる。いくらエイスワンダーとリレイ・トゥリガーがいるといつても……」

「大丈夫ですよ」黄信号を無視して交差点を走り抜ける。別に根拠はない。適当に相づちを打っているだけである。ただ、荒野は単に繰り返言を言っているのではなく、あの実験の時間様に思考の賦活剤としてわかりきったことを言葉にしているだけだと、エリカは確信していた。

「あの子達なら大丈夫です」アクセルをさらに踏み

込みながら、エリカはもう一度繰り返す。

「それに、もしあの子達だけで駄目でも、そういう時のために私達大人がいるんじゃないやありませんか。向こうに着くまでに、作戦を考えておきましょう？」

アリスサムの渾身のパンチが、クインジェネシスの横腹に突き刺さった。だが大したダメージを受けた様子もなく、あっさりといのけられる。巨大な翼が巻き起こす衝撃波に、カメリアとペイビーレスが二人まとめて吹き飛ばされる。リサが分身し、キサラが霧になって攪乱した隙に、ジュンの体をジャンプ台にしてクララが体当たりをかける必殺コンボも、巨大な掌に受け止められてしまい、本体には届かなかった。

「何よこれ……こんな化物、一体どうしたらいいの」  
ピルの壁にめり込まされたカメリアが、やっとのことで這い出しつつ、苦しい息の下から呻く。

クインジェネシスのパワーは圧倒的であった。マーベルドールズのアームドスキンはおろか、エイズワンダーですら力負けする。カメリア達はもう限界だ。援軍に駆けつけてくれたフェーリアス・スリーのトリッキーな攻撃も、チタン繊維で縦横に覆われたクインの体には通用しない。

「……リサ。椿さん達のあたり、まだ避難完了してないから。誘導の方を優先して」

クララの言葉に、リサは一瞬何か言いたげな顔をして、それからすぐに他の二人を促して駆け出していく。リサ達のフェーリアス・モディファイアーは、元々純粋な攻撃力にはさほど秀でていない。さっきのコンボが通用しないと、彼女達がクインにダメージを与える手段はないといっている。友達に戦力外通告するのは辛かったが、体面を気にしている場合ではなかった。何しろ、クララ自身ですら、どうやったら勝てるのか皆目見当がつかないのだ。

クインジェネシスの手から放たれたビームを避けて上空へ舞い上がる。ワイヤーを編んで作った前衛芸術のような顔をめがけてワンダービジョンを撃つが、頬に小さな焦げ跡を作っただけだった。ダンブカーのような巨大なパンチをかわし、胴体に近づこうとするも、太い髪の毛の束になぎ払われる。路面に激突し、跳ね返ってもう一度激突しそうになった所を、寸前でリリイが受け止めてくれた。

「ありがと……ねえ、なんか作戦ない？」

リリイは悔しげに、黙って首を振る。彼女の超感応能力はその性質上、人間の能力にしか効果がない。機械であるクインジェネシスや、アームドスキンの力には干渉できないのだ。

「打つ手なしか……どうしたらいいんだろ、あれ」  
「打つ手なら、あります」

突然、背後から声がした。振り返ると、瓦礫だらけの路面にはどう考えても不向きな、地味で品のいいハイヒール。緊張と足場の悪さでかたかたと震えながら、それでも両足をしっかりと踏みしめて、真鍋エリカがそこに立っていた。

「クララさん。あなたが持つている、それを使えば」  
エリカがまっすぐ指さしたのは、クララがスーツの胸元に入れておいたアクセスストーンだった。

「エリカ先生！ お久しぶりです」クララは一瞬、状況も忘れて会釈してから、「え、でも相手はスカイリンクスなんだよ？ ミス・マーベリックでも勝てないって話なんじゃ」

「私では勝てないわ。でも、あなたがアームドスキンをまよえば別よ、クララさん」

「ええっ!?」  
エリカの後ろから、危なっかしくよたよたと瓦礫を避けながらノート端末を抱えてドクター荒野が出てきた。

「クインジェネシスはスカイリンクスのオメガ・バッテリーを取り込んだが、それ以外のシステム部

分はまだ完全に支配下に置いていない。三枝市が停電してないのがその証拠だ。アクセスストーンも、ちゃんと機能するはずだ」

「私がアームドスキン……うーん……でも」クララが首をかしげる。「アクセスストーンって、シンクロ率が大事なんでしょう。私が使っても、大した力が出ないんじゃない？」

「そこはリリイさんの力を借ります」

エリカが、今度はリリイに向き直って微笑みかける。「挨拶が遅れてごめんなさい。すぐまた会えるとは言ったけど、まさかこんな形になるなんてね」

「……」リリイは黙ってすこし頭を下げる。心なしか、頬が赤らんでいるように見えた。エリカが今はMIXに出向中の身だということを、その時になってクララはようやく思い出した。どうやら彼女はMIXでもいい先生だったようだ。

「リリイさん、あなたは人の心と感応して、時には肉体までも操作することができる。私の生体波動を読み取って、クララさんののをそれに合わせられるはずね？」

「え」リリイは一瞬意表を突かれた顔になり、それから口に手を当てて考え込んだ。「やったことないけど……多分、できる」

リリイがエリカを見て、それからクララを見る。一瞬考えて、クララは小さくうなずいた。胸元にしまっていたアクセスストーンを取り出して握りなおす。

リリイが左手でエリカの手を握り、右手をクララの胸元に当てる。リリイが目を閉じて精神を集中すると、クララは胸元に当てられた手から何かが流れ込んでくるのを感じた。

ずっと聞こえていた曲が突然転調したような、コップの中の水に別の色が混じっていくような、何とも言えない異様な感覚が全身に広がっていく。正直、いい気分のものではない。ただそれと引き替えに、

右手の中のアクセスストーンがどンドン輝きと熱を増していくのが、目を閉じていてもわかる。

「今よ！」

エリカが叫ぶと同時にクララは目を開け、右手を高く掲げて叫んだ。

「アクセス！」

今はクイーンジェネシスの体となったスカイリンクスの、その鳩尾のあたりにあるレンズから一条のエネルギービームがほとぼしる。ビームはまっすぐクララの手にしたアクセスストーンを直撃し、凄まじい衝撃波が一带をなぎ払った。

飛び散る瓦礫の中から、エリカと荒野を両腕にかかえたりリイが飛び出してくる。その視線の先、もうもうと立ちこめる土煙の中心に、稲妻を帯びた何かが見えた。

その何かが腕を上げると、その余波だけで土煙が一瞬で吹き払われる。そこにいるのは、白とピンクのコスチュームに真っ青なマントをひるがえし、全身から雷光をほとぼしらせるクララの姿だった。

「エイスワンダー・マーベリック・トリガード！」

「すごい……」二人を抱えたまま、リイが呆然とつぶやく。「なんて巨大なエネルギー。私の力がまるで届かない」

「そりゃ、そうですよ」抱えられたまま、荒野も興奮した声で答えた。

「エイスワンダーと、ミス・マーベリックと、リイ・トゥリガー。地球最強の三人のヒロインの力が一つになったんだ。今の彼女なら、なんだってできる」

青白い光を放つ瞳が、リイ達の方を見て微笑む。親指をぐっと立ててみせてから、クララ……エイスワンダー・マーベリック・トリガードは閃光のよう

にまっすぐクイーンジェネシスの巨体へ突っ込んだ。ビルほどもあるクイーンジェネシスの体がゆらぐ。クララの一撃は、クイーンの強化カーボンとチタン製の腹に大きなクレーターを作っていた。

「もう一発！」

クララは再度拳を振り上げ、今度はクイーンの横つ面を殴りつける。重い轟音と共に、クイーンジェネシスが地面に倒れ込む。ケーブル製の髪が宙に舞う。

『貴様、よくも』

「こっちの台詞よ！」クララが叫ぶ。「あんたのせいで、テスト休みは潰れるわ、地球一周マラソンさせられるわ！」

クイーンの両手からエネルギービームがほとぼしるが、クララは右腕で苦もなくはじき返す。なおもクララを掴もうとするクイーンの右腕を逆に両手で抱え込み、肘からちぎり折った。

無数の電子部品とケーブルを飛び散らせ、クイーンが苦鳴を上げる。間髪を入れず、今度は左腕を肩からもぎ取ると、大きく開いたその傷口にクララは頭から突っ込んだ。

『おのれ』

クイーンが激昂するが、両腕がなくてはクララを掴むこともできない。投げ飛ばされた腕を探しているうちに、クララは完全にクイーンの体内に潜り込んでしまった。

「クララさん！」クララの意図を察した荒野が、慌ててノート端末を開いて通信システムに向かって叫ぶ。「オメガ・バッテリーは壊さないで！ あれの内蔵エネルギーが万一暴走したら大変なことになる！」

クララに聞こえたかどうかはわからなかったが、荒野、エリカ、リイの三人が固唾を呑んで見守るうち、クイーンは苦しげにもがき出した。再生途中の腕で、自分の腹と胸のあたりを何度も殴りつけてい

る。

『貴様！ 貴様！』

だが効果はないらしく、やがてクイーンの全身から小さな火花が散り始める。火花はどンドン数を増し、クイーンの全身にからみつく電撃となり、やがてその光が頂点に達すると、のたうち回るクイーンの腹を突き破ってクララが飛び出してきた。黒いドラム缶のような形状をした、オメガ・バッテリーを肩にかっついてい

「クララ！」

「クララさん！」

クララはリイ達の方へ手を振ってから、まだ癒撃しているクイーンジェネシスの体に視線を据える。両眼から目もくらむような光の柱がほとぼしり、のたうち回るクイーンの体を焼き尽くしていった。

一面に真っ黒な残骸が残るだけになってから、ようやくクララは目を閉じ、それからあらためてリイ達の方へ向き直って、大きくピースサインを出す。

「エイイ！」

その一言を待っていたように、クララの体を包むアームドスキンが粉々にはじけ飛んだ。

一瞬で全裸になり、しばし呆然とするクララ。それから、

「ぎゃーっ!!」

悲鳴を上げて縮こまる。放り出されたバッテリーを、慌ててリイが受け止めた。

「そうか、エイスワンダーのパワーにスーツが耐えきれなかったんだな。発熱が見られないのは衝撃吸収構造が逆向きにも働いたと考えればいいが、しかし本来のスーツも一緒に消えてしまったというのエイスワンダーのスーツとアームドスキンの共鳴性が……あ痛てててっ」

「こ・う・き・さん！」

夢中でデータを取っている荒野の耳を引っ張って、エリカが物陰へ連れていく。避難誘導を終えたりサ

達が毛布を持って駆けつけてくるまで、結局クララはそのままであった。

「あーあ、最後のアレさえないなければなー。私も自分でアームドスキン作ってもらうのに。凄かったんだよー、ママより全然強かったんだから」

この事件でアクセスストーンばかりかスカイリンクスまで失われてしまい、ミス・マーベリック復活は延期となってしまった。エリカは慌ただしい休暇を終え、リリイと共にイギリスへ戻っていき、荒野はラボでアームドスキンの研究に戻る。そしてクララは、すっかりお腹が大きくなった母アテナの代わりに、台所で晩ご飯を作っていた。

「自分の力もまだ完全に使いこなせないのに、よその力を借りようなんて十年早い」

後ろで鍋の火加減を監督しながら、アテナが言う。「えー。考えが古ーい」

「そんなものに頼らなくなつて、あなたは私より強くなるわよ。これから経験を積みばね」

「考えが古ーい」

「あなた、もうすぐお姉さんになるんだから。もうちょっとしつかりしてよ」

アテナが苦笑すると同時に、玄関のベルが鳴る。二人の顔がぱっと明るくなった。

「パパだ！ お帰りなさい！」

エプロンで手を拭くのもそこに、クララが玄関へ飛び出していく。アテナはため息をつき、つけっぱなしだったコンロの火を消してから、娘の後を追った。

完







オイ  
早くしないと  
人来ちゃうだろ！

くそッ  
何度やっても  
千円札戻って  
きちまう！



その自販機は  
免許証等で年齢認証  
しないとダメなヤツよ

うわア  
夜回り  
ワンダーだッ！

代わりに本を  
買ってあげても  
イケド...

そ・れ・よ・り・も

\*ダメです



んッ

んッ  
んッ  
んッ

ちゅぽ

ちゅぽ

んッ

ああん

若い子の  
あり余る性欲って  
ステキっ

あんッ

問答無用で  
ナカ出しなのねッ

いッ  
イッちやうッ

アナルと  
ヴァギナにッ  
同時射精されて

それから

また  
あの自販機  
行ってみようぜ!

撤去  
されてるうッ

さらば  
少年の日の  
光と影



連載は終わったけど同人としてまだ続けている事に喜びを感じております。  
しかも現在新作を執筆しながらの制作なのですごい活動意欲だなあと……。  
やっぱり「ウチムス」で個人的に好きな場面はディープスロートが誕生した時ですね。(前回と変わらず…)



今回は諸事情により時間がとれず、イラストのみの参加とさせて頂きます。

作画のテーマとしましては、エイズワンダーからディープスロートへじわじわと変貌していく精神世界の様を、キャットファイト(最近ハマってる)風に仕上げてみました。

ナツピー

## ザヴィラン・ビヒュン

故郷の惑星を破壊した恒星クジラを追って宇宙を旅している。  
途中、地球に立ち寄った際にエイスワンダー親子に窮地  
を救われその恩義?からか、しばらくの間  
N. U. D. Eに居候している。

海洋のモンスターや怪人に強い!  
液体の組成を自由に組み  
替えられる能力もある。

斬鯨刀  
凶悪な  
宇宙クジラを  
三枚におろ  
せる唐い刀

スカルシールド  
硬い!そして  
内蔵武器が  
豊富

次元羅針盤つき  
コスモクロノ  
メーター

星間クジラのヒゲ  
で編んだ、  
マフラー

画：迂闊十臈

# ウチムス・ヒーローカード

## ZAIDA-DICK

ザイダディック号 - 銀河連邦最強の宇宙捕鯨戦艦! 彼女等の住まい兼移動基地各種兵器や戦闘艇等を搭載している

前はヴィラン側だったので、今回はヒーロー側を考えました! 宇宙のさすらい者達とか! 好きですw



### - 相棒ズ -

#### イービル・バシャン

ザヴィランの同郷の友、射撃が得意で早撃ちの名手ニヒルで皮肉っぽいところもあるが、実は情熱家



#### カラフ・ズイシン

同郷の友その2、怪力の持ち主で大飯くらい料理の腕前は天下一品。特に星間クジラのオーロラ煮は絶品

Clara  
VS  
Mei

SERIOUS GRAPHICS  
by ICE  
Twitter:@seriousgraphics







おばはんのクセに  
えっろい体しやがって  
ぜったいやってやる

私たち家族で来てるの  
ごめんなさいね

そう言われてもねえ...

いやあ  
そこをなんとか

俺たちすこしだけ  
お話が聞きたい  
だけですから  
ね?ね?

黒髪のほうは  
チヨロそうだな  
股間チラチラ見てるの  
バレバレだって笑

拘束具とアテナの監視込みで  
一時的に自由を得たゼノビアと  
子供達は羽根を伸ばす為  
真夏のビーチに訪れた!

しかし、そこは有名な  
ヤリモクサンパビーチだった!

子供達が別行動を取るや否や  
ハンター達のギラついた視線が  
アテナとゼノビアの  
豊満な肉体に絡みつく!

果たして  
2人の運命やいかに!

水着のアテナとゼノビア  
が描きたい!と思ったら  
こうなってしまう...  
アレグR☆

# MILF IN THE BEACH



KISHALA



LISA



JUN



Furious Three

# **Lazy Cozy Monday**



MAHUYU



TSUBAKI



KASUMI

Gemma

六月の、とある月曜日のことである。

「あーあ、絶対『インテンス・スリー』の方がカッコいいと思うんだけどなー」

リサはアイスカフェオレのグラスにほっぺたを押し付けて、フテ腐れた声を出した。

「大体、センスが古いとかどの口で言うのよー。自分は胸開きタイプに眼帯とか、昭和の悪の女幹部みたいな格好してるくせに」

「もー、司令の眼帯はべつにファッションしてるんじゃないでしょ。あれ、ファッションだっけ？」

ジュンがのソーダ水のストローを唇から離し、苦笑いしてなだめる。

「知らないな。それに私は『フューリアス・スリー』の方が好きだ」

キサラはいつものように、ほうじ茶を飲みながら淡々と言い添えた。

「私も気に入ってるよ。なんか迫力ある感じがいいじゃない。あと、『インテンス』って響きがあんまり形容詞っぽくなくて、音的に収まりが悪いのが気に入ってたんだよね」

「裏切り者ー」

春原リサ、羽田ジュン、キサラ・ジャルブラヴァー。NUDE本部の一般隊員だったが、つい先日、新型特殊スーツの実験台になることと引き替えにヒーローデビューを認められたばかりの、新米ヒーローである。

「まあ、いるものよ、自分のセンスを人に押しつけるのに抵抗のない人というの」

椿は紅茶のカップを置いて小さく息をついた。

「総司令直々の命名だしねえ、反対しちゃう損だと思っとうよお。別にヘンな名前ってわけでもないんだし」

香須美も、カップを空にしておっとりと言ひ添え

る。

「ていうか、チーム名決めるのとかめんどくさいじゃないか。勝手に決めてくれるなら楽でいいだろ」

真冬はカルピスウォーターのグラスを干して、口元をぬぐいながらあつけらかんと言った。

如月椿、八巻香須美、仙道真冬。三枝市を守るスパーヒーローイン、ミス・マーベリックのサイドキックチーム「マーベルドールズ」のメンバーである。リサ達よりちょうど一学年上で、ヒーローとしても先輩にあたる。

NUDE三枝市支部の最上階にある談話室。平日の午後で他に人がいないのをいいことに、六人の女子は窓際が一番大きな丸テーブルを占拠し、思い思いにくつろいでいた。

「それでえ、新型スーツのフィッティングって、終わったの？」

二杯目の紅茶をポットから注ぎながら、香須美が尋ねる。

「今日の分は、一応。今日の結果で、また明日再調整するみたいですけど」リサが答える。香須美が渡してくれたカップを、会釈して受け取った。

「今日はあとでクララもこつちに用があるって言うから、それと合流して帰ろうかと思ってるんですけど」

「随分手間がかかるんだな。私らの時はアクセスストーンもらって、初期登録してハイ終わり、みたいな感じだったよな？」

「あれはお兄様がたまたま作ってあったのをもらっただけだから。それに、貴方達のは新型なのでしょう？ フューリアス・モディファイアーとかいう」

「そーなんですよー。仕組みはさっぱりわかんないんですけど、とにかく個性に応じた特殊能力が付くんですって。私は分身で、ジュンは全身がゴムみたいに弾むようになって、キサラなんか液体に変

わるんですよ。すごくないですか？」

「へー！ アームドスキンって、そんなこともできたんだ。ただのパワードスーツみたいなもんだと思ってた」

「私達のは基本そうだけど、エリカ先生の使ってるオリジナルのアームドスキンには、もともとそういう機能もあったよお」

「え、そうなの？」

「オリジナルのアームドスキンはあ、モディファイって使って、使う人の心にシンクロして肉体を作り替えてるんだよ。システムが複雑だし、不確定要素も多いから、私達の第二世代型では省かれちゃったけど、リサちゃん達のモディファイアーは逆にそっちの機能を発展させたものだね」

「へー！」

「私達にも、ちよつぱりモディファイ機能は使ってるんだよ。私と椿ちゃんと真冬ちゃん、みんなスーツのデザインが違うでしょ？ あれ」

「え、あれそうなんだ！」

「てっきり、お兄様が私達に合わせてしつらえてくれたものとはかり……」

「誰がデザインしたのかなと思っちゃいたけど」

「……」

「あ、椿さん意外とマジでショック受けてる」

「……あれ？ でもミス・マーベリックには、特殊能力みたいのは付いてないですよ？ 普通にパワーが強いただけで」

「先生の場合、あのパワー自体が特殊能力なんだよお。エリカ先生は全方向にコンプレックスの塊だから、それが反映されるとああいう風になるの」

「そういう仕組み!?」

「貴方達は、やっぱりエイズワンダーのサイドキック

クから始めるの？」

「ジュンが軽食コーナーから大量に持ってきたビスケットをつまみつつ、椿が訊ねた。」

「やー、それも考えたんですけどね……」

「と、リサは頭をかく。ジュンが後を引き取って、「クララちゃん、もう世界的に有名だから。今更サイドキックなんていらなそうっていうか、下手したら便乗キアラみたいに思われそうで……」

「そういう心配もあるのねえ」

「気にすることないと思うけどねえ。クララちゃんくらの人気者で、サイドキックがない方がむしろ異例なんだし」

「あと、年下のヒロインのサイドキックというのも、正直ちよつと抵抗があるので」

「椿さん達は、便乗とかそういうこと言われませんでしたー？　ないか、同じアームドスキン仲間なんだし」

「アームドスキン仲間って何よ。貴方達も同じでしように」

「というか私らの場合、椿が先生好きで、手伝いたいって言って始めたんだもん。便乗も何もないよ」

「真冬、うるさいよ」

「椿ちゃんはツンデレだよねえ。っていうか、ヤンデレに近いよね」

「昔の先生へのイビリ、結構洒落になつてなかったもんなん」

「そうそう。それで、他の子が先生に同じことやると怒るの。あれって独占欲？」

「あと、気になる子についてキツく当たっちゃう的な」「その話やめて。本当やめて。無かったことにしたいんだから」

「ああ、そういうええ椿さん達、昔はヴィラン的なアレだったという話を聞いたことが」

「ちよつ、キサラ」

「的なアレというか……まあ……うん」

「若気のいたりというか……」

「高二病……で済んでたらいいけどね」

「え、まさかわりとガチめの？」

「……ぶつちやけて言うよと、ハタチ越えてたら普通に実刑が付くレベルだった……」

「今思うと、あれ一度も人が死ななかつたのは奇跡だよねえ。先生のおかげもあるけど」

「マジですか!？」

「だから思い出したくないんだって……当時は私達未成年だったし、サエグサのスキヤンダルの方がニユースとしては大きかったから、私達のこととはあまり表に出なかつたのね。先生とお兄様がかばってくれなかつたら、どうなつていたかと思うわ」

「去年までは一応、保護観察付きだったんだよ、私ら」

「へー……」

「もしかして、訊かない方がいいことだっただろうか」

「訊く前に気付いてよ、あんたは」

「そうだ、ヤンデレと言えはすね」

微妙に重い空気の中、さくつと会話を切り出したのはキサラである。

「あ、そつち広げるんだ？」

「クララなんですが」真冬の突つ込みにも構わず、キサラは続ける。

「学校に親友がいて、その子も隠れスーパーヒロインなんです、それがガチでして」

「ガチって、何が？」

「クララのことガチで好きなよう」

「あー」

「あーあー」

ウチらがクララのヒーロー仲間だって言ったら終始マジ殺気含みで睨んできて」

「ああー」

「あーあーあー」

「正直、彼女が何をするかわからないというのも、クララのサイドキックはやめておこうという理由の一つでした」

「クララちゃん、女子にモテそうだもんねえ」

「もう、めつちやモテますよー。ほらキサラ、前に仕事で、あの子の学校生活を追っかけたことがあつたじゃない。休み時間のたびに毎回違う子達が群がって、すごかつたですよ」

「いつでもどこでも輪の中心にいて感じだったよね。高校時代、クラスでそんな場所に一度もいたことないよ、私。ああいうのをカリスマっていうのかも」

「そのくせスキが多いから、男にもモテるんだよね」

「そうそう！　で、特定の彼氏はいないという……もうなんだ、女神かなんかかあの子は」

「実際、女神みたいなものでしょう。ハイパートピアの、それも女王候補なんだから」

「あー……血筋ゆえのカリスマってやつなんですかねえ」

「ハイパートピアって、女の人しかいないんだっけ。やっぱり、そういう趣味の人ばかりなのかな」

「いや、アテナさん普通に結婚してるじゃん」

「だが女ばかりの国で女王候補に推されるということは人望があるわけだから、多少ともそういう傾向はあるのかもしれない」

「血筋ってそういう方向に行くわけ？」

「いやでも確かにクララちゃん、あのルックスと性格のわりに不思議なくらい男子に興味ないとこあるし……」

「よーし、今度会つたらレズホイホイと呼んでやろう」

「やめたげて下さい」

「キサラ達から聞いたぞつつつて」

「やめて下さい」

「真冬、あんた人にそんな仇名ばかりつけてるから、面倒見るわりに後輩から好かれたいのよ」

「えっ」

「このフードコーナー、美味しいよねえ」

「ジュンが三皿めのシフォンケーキをカウンターからとってきて、幸せそうな顔をした。」

「あんた、まだ食べるの」リサが呆れて言う。ジュンは笑いつつも、躊躇なく一個目を口に入れる。

「美味しいんだって」

「そりや美味しいでしょうけども」

「ジュンのスイーツ狂いはともかくとして、確かにこのフードコーナーはレベルが高い。NUDE本部とは比較にならない」

「食べ物だけじゃないよ。仮眠室のベッドも超ふかふかだし、サウナもマッサージ室もあるんだよ。しかも全部タダ！ 私ここに住みたいよ」

「外資系の大企業みたいだねえ」

「こつて、元サエグサの建物だからな。福利厚生はめっちゃ充実してるよ」

「え、そうだったんですか!？」

「あれ、もしかしてこれも訊かない方がよかつた的な」

「別にいいわよ。……一度解体された時、本社ビルと海外工場の一部以外はいったん全部手放したの。」

「ここは元物流センターか何かだったと思うけど、それをNUDEが買い取ったのね」

「物流センターでこのレベル……」

「サエグサ・インダストリーはそういうとこ、すごく先進的だったんだよ。世界規模の企業になって

も地元めちゃんと根を下ろしてるところとか、海外ですごく評価されてたんだから」

「へええ」

「椿のお父さん、偉かったんだなあ」

「いらぬわよ、変なフオローは」

「まあ考えてみれば、ただ悪どいだけであんな大企業になれるわけはないですしね」

「あそこ、いま企業ヒーロー募集してますよね？ ちよつと受けてみようかなあ」

「再建されてからは福利厚生の子算、半分くらいに減つたと聞いたわよ。社食のレベルが落ちて悪評頻々だとか」

「げー!」

「企業の勢いつて残酷なくらいそういう所に出るよね……」

「そういうえば、この機会に」と、リサが身を乗り出した。

「ヒーローとして心得とくべきコツとかアドバイスとかつて、あつたらせひ聞きたいんですけど」

「唐突ね」若干引きつつも、椿が応じる。真冬もからかうように、

「なんだよ、さんさんハシヤいでたくせに、急に弱気だな」

「いやあ、いざその時が近づくとやつぱり緊張するといひますか」

「リサちゃん達は、高専組でしょお？ そういうコツなんか、学校で教えてくれるんじゃないの？」

「高専？」

「椿ちゃん、知らない？ NUDEが経営してる専門学校があるんだよ。ヒーロー養成のための」

「ウチら、その同期なんですよ。元ルームメイトで」

「全然知らなかった……NUDEって手広いのね」

「つか、あんなデカイ組織が自前のヒーロー育てるための学校ってなんかヤバイ雰囲気ない？ 大丈夫なの、そこ？」

「いちど国会で問題になったよお。うやむやになつたけど」

「マジか。怖えなNUDE」

「いやまあ、別に変な教育とかはされなかったと思ひますけどね……」

「どんなことを教わるの？」

「普通の授業もしますよ。ただ格闘技の科目が多かつたり、特殊能力開発訓練があつたり」

「レスキュー技能なんかも教わつたな」

「あと、法律の授業がありました」

「法律？」

「ヴィランを取り締まる法的根拠とか、建物を壊しちやつた時の責任とか」

「そんなこともやるの……本格的ね」

「まあ結局、本当にヒーローになれる子なんて一握りですけどね。大概はウチらみたく、一般隊員として就職するんですよ」

「やつぱり怖い気がするぞ、NUDE」

「そこまで本格的な訓練を受けてきてるなら、今更私達に教わることもなっていないじゃない。大体、貴方達職業ヒーローになるんでしょ？ 大学生と兼業でやつてる私達より、言つてみれば専門じゃないの」

「でもやつぱり、実際に活動してみても初めてわかることつてあると思ひうんですよ」

「そう言われてもなあ、うーん」

「強いて言うなら、公私の線をちゃんと引くことかなあ？」

「公私？」

「うん。どこから出動して、どこまで人任せにするか、基準を一応でも決めとかなないと、際限なくしんどくなつて潰れちゃうよ」

「なるほどー！」

「そういうえば、先生も昔出動しすぎでノイローゼ気味になってたことがあったわね」

「でしよでしょお。有名になるとそういうプレッシャーもかかるから。ツイッターとかで『どうしてあの時フューリアス・スリーは来てくれなかったんだ』なんて呟かれたりすると、ヘコむよお」

「うわー、私そういうのめっちゃや気になるタイプだー」

「私は気にならないタイプだ」

「私もわりと平気かなあ」

「アンタら冷たくない!?」

「メンタル強いわね、貴方達……」

「でも実際さあ、ヒーローに必要なものって、何なんだろうーね？」

全員のグラスとカップが空になり、なんとなくけだるげな空気が流れ始めた頃、真冬がぼつりと言った。

「え、何ですかいきなり。公私の線の話？」

「いや、そういうのでなくて」

「アツい正義の魂とか？」

「そういうのでもなくて。サイドキックとヒーローを分けるのって、何なんだろうって最近思うんだよね」

「なに、貴方そんなこと考えてたの？」

「だって、知りたいじゃんかさー！ 例えばサージヤント・キャンディとか、言ったらフツーの人だろ？ パワーだけならどう考えたってスキニングあたし達の方が強いじゃん」

「まあ、そうだね」

「でももしあの人とガチでやったら、勝てる気がする？」

「……」

「……」

「ね？ 何ていうか、スペックじゃないんだよ。あつちはヒーローで、こつちはサイドキックで、その線ってそう簡単に崩れないんだよね」

「真冬ちゃん、哲学的ー」

「てか、ウチらこれからヒーローデビューするんですけど」

「うんだから、その辺のコツみたいのを掴んでおかないと、あんた達もデビューしたはいけどなんちゃってヒーローで終わるんじゃないかなって」

「怖いこと言わないで下さいよ！」

「真冬ちゃん、オニー」

「他人事じゃないんだぞ。エリカ先生がドクター荒野と結婚したら、寿引退するかもじゃん。そうなたら、私らだってヒーローデビューすることになるかもしれないだろ」

「ううん……それはそうだけど」

「こちらヒーロー活動をやるに当たり、一度はちゃんと考えておくべきことではあるよな」

「長くやってたら、絶対そういうとこ問題になりそうだもんね。やっぱり、覚悟とかかな？」

「どうかなあ。そういうのって、むしろヒーローになった後で身につくこともあるんじゃない？ エリカ先生だって、最初はヘロヘロだったよお」

「そもそも先生がミス・マーベリックになったのは当時の私達を止めるためで、それもお兄様に説得されたからだったものね。世界の平和とか、そういうことはあまり関心がなかったんじゃないかしら」

「私は、天運だと思います」

「それを持ち出しちゃ身も蓋もないじゃん。努力でどうなることでもないしさ……まあ確かに、持っているなど思うことはあるけど」

「でしよう」

「でも先生もエイズワンダーも、無敗というわけ

はないわ。私達や他のヒーローが助けに入らなかつたら危なかったということだって、何度もあったでしょう」

「だから、そういう助けてもらえるところもひっくるめて運なのではと」

「そういう考え方だと、私達自身も大差はないわよ。何度もピンチになったけれど、何のかんのでエリカ先生や他のヒーローに助けられて、今こうして無事にいるのだから、同じことでしょう」

「……むう」

「認知度とかあ？ ほら、人から見られることが重要なあ」

「それも、最初は無名のヒーローだっているのでは」

「うーん」

「リサはどう思う？」

「うーん……クララを見ると思うんだけどね、やっぱり運じゃないかなと」

「ほう」

「でもキサラの言うのとも、少し違くてさ。勝ち負けの話じゃなくて。何て言うか必要な時に、必要な場所に居合わせる……」

「間の良さ？」

「そうそれ！ あの子ってねえ、ホントにそれがスゴいんですよ！ ここにいないと縮まらないなとか、ここに駆けつけたらカッコいいなとか、そういう場面になるとかつなっつらっつ来合わせるんですよ！」

「それは、まあ……先生もそうかも」

「でしよう！ 勝ち負けとかおいて、そういう美しい場面は絶対外さないんですよ。それがズルいつて前から思ってたんですけど、あれがヒーローの資質ってやつなのかなーって」

「前から思ってたけど、リサってクララのことわりと本気で嫉んでるとこあるよな」

「とつかそれがヒーローに必要なものなら、やつ

「う……」  
「う……」

と、階下へ続く階段に、ひよいと一つの人影が現れた。

「なになに、みんな何の話してんの？」

「！！！！」

「あ、椿さん達、お久しぶりでーす。珍しいね、六人揃ってなんて」

「……………」

「……………」

「……………」

「？」

弾けるように同時に笑い出した六人を前に、ただただ当惑するばかりの遥クララ。

六月の、とある月曜日のことだった。

完





by 二たぢ 粉味  
スーパー  
& 合体

合体  
最強...

最強  
合体!!!

合体

合体  
落

合体

合体



憧れ  
ちやう〜♡

仲良し  
クララの  
ママ...

油断したやな  
こくとも!



最強の  
美魔女  
だしい  
☆

ウフフ



『おま女』  
じよ

最強の  
度



マジホント  
リアルニ...

粘膜ジューブなの  
くらやましーよね♡♡

### マジグちゃん公式記録

設定  
ミジグちゃん  
ました  
「巨女子」  
たからん...  
てハッ♪

本名 / 小中ひなた (MOS 19歳)

身長 2.5m超 / 肌色 グリーン

正体は身長150センチのひ弱な  
女子中学生 (素顔はナイン)

戦後のひとりは  
不可欠!!

この設定が  
お年娘ちゃん♪

クララとは  
大の仲良し☆

本篇ではモブ2コマ  
セリフ無しごす  
みつけネ!

11571474

お大怪(快)作!! よくも泣かせてくれましたね ♡

『ウチムス』実写ドラマ化支援マンガ(どこが!?)



おばさん  
超エロい  
っすね。

「おばさん」  
言うなッ!!



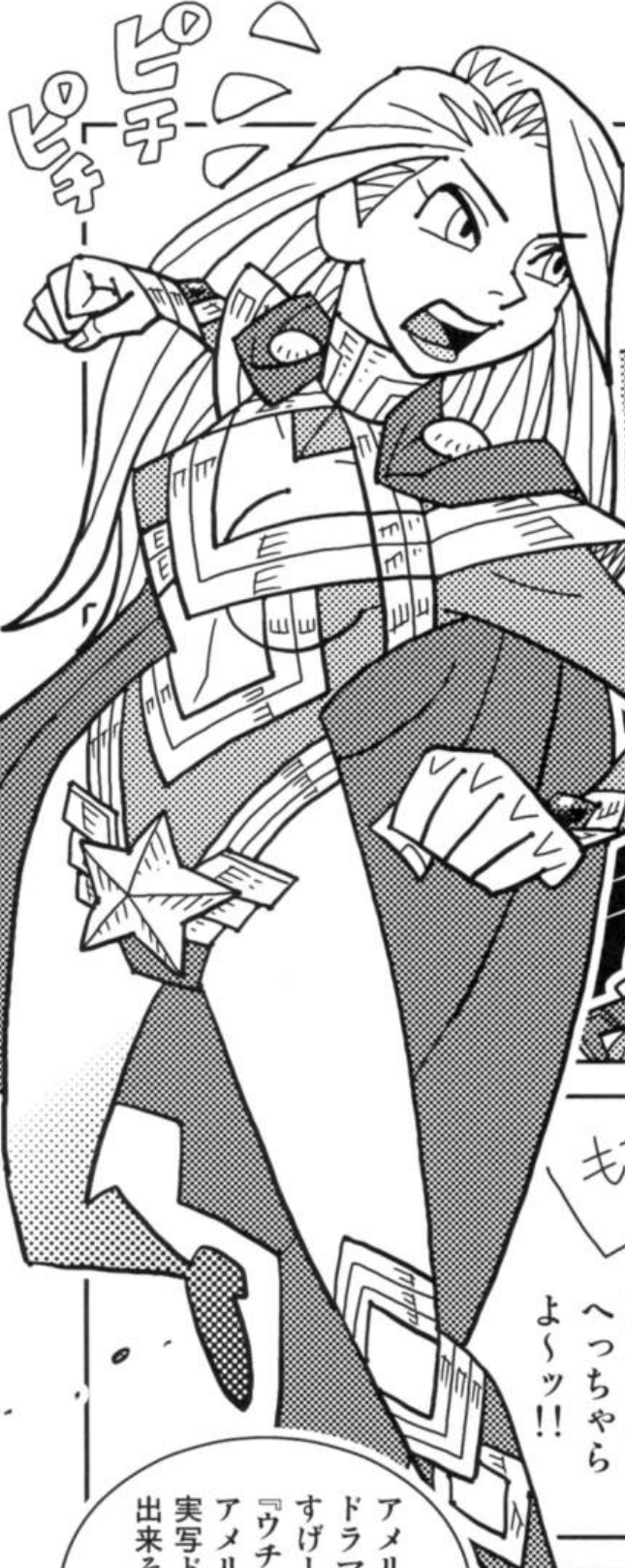
スターラボの仲間たち



アナタ…  
そんなの  
勝たなくて  
いいから!!



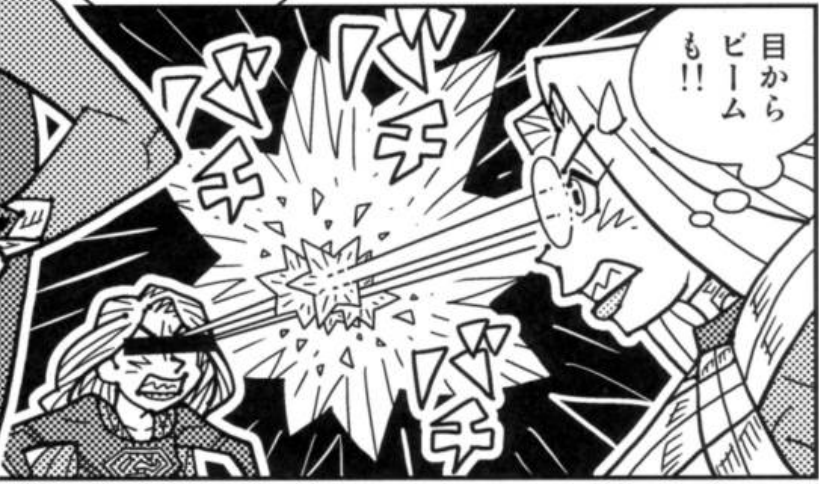
※ドラマでも本当にこういう会話してます。



私は  
スー●  
ー  
ガール

従弟を  
護る為に  
地球へ  
送られた

お互いに  
肉弾戦が  
得意な  
上に



目から  
ビーム  
も!!



もちろん  
ハズカシ  
〜けど  
ね!!

……  
ならばッ

私は  
脱がされても  
へっちゃら  
よッ!!

アメリカの  
ドラマ界って  
すげーッ!!  
『ウチムス』も  
アメリカでなら  
実写ドラマ化  
出来そうじゃん。



私だって  
もう他の  
番組で  
脱衣済み  
よッ!!

平気!

ケロリ

※スー●ーガール役のメリッサ・ブノワの裸身は  
映画秘宝'16年8月号を御参照下さいませ。

バイオラ・スターの  
新コスムのメモ  
だよ  
なにか描こうか  
おにいさまの筆の  
チョイスだよー



**VIOLA-STAR**



平和を  
取り戻した  
世界!!

だが突如  
次元を超えて  
謎の敵が  
現れた!!

一体  
何者なの  
:!!

っっっ  
っっっ  
強い...!!

プリンセス  
プリンセス

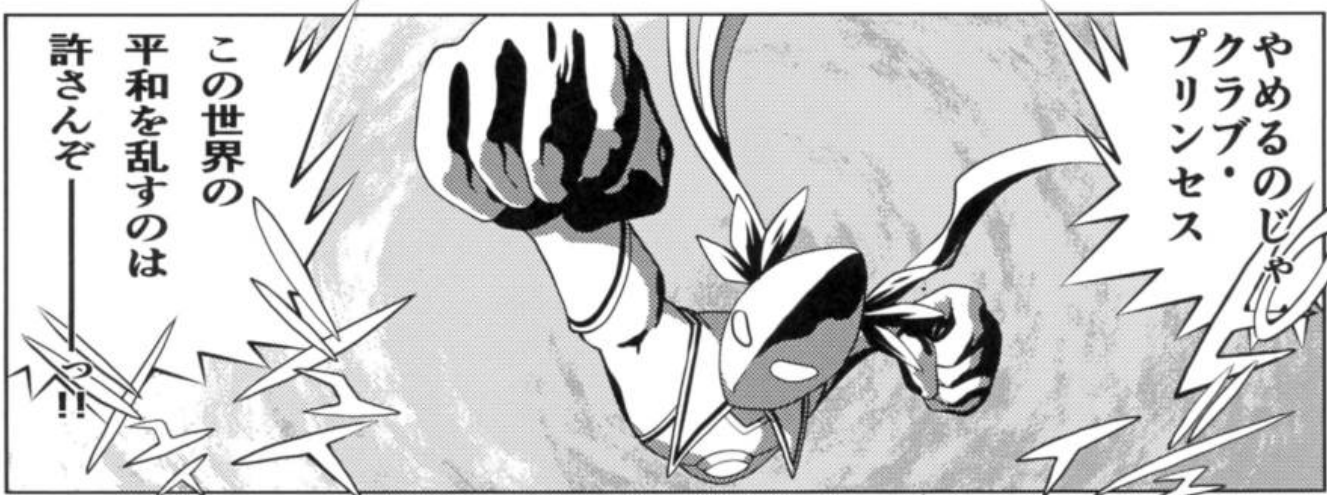
我が名は  
クラブ・  
プリンセス



封印された  
別次元から  
やって来た

この世界は  
妾の物となるの  
じゃ

?!?



やめるのじゃ  
プリンセス

この世界の  
平和を乱すのは  
許さんぞ

!!



行くぞ  
プリンセス!!

あっ、  
ぶつとる、  
こやつ!

とりあえず  
出だしは  
敵にまわらせ  
ぬさ——ん!!

同じく  
別時空からの  
竜騎兵、  
リパーサー  
見参!!

元々  
貴様が  
出された  
くせに——!!

同じく  
聖剣王  
参上——!!

現役だけど  
遊びに  
来たぜ——!!  
e t c

# ウチムス世界年表

## 改訂第2版

46億年前 地球誕生。

2億4千万年前 ペルセウス座NGC1260銀河で発生した巨大超新星爆発から超エネルギー生命体誕生。のちのスターゲイザー。原生人類誕生。

25万年前

様々な特殊能力を持つ新人類ホモウルティムム出現。原生人類を奴隷化して巨大文明を繁栄させる。

2万3千年前  
1万2千年前

ムー大陸に超人類による統一国家誕生。地球全土を支配下に置く。ムー大陸最終戦争により太平洋に沈む。ムーの女性達、戦に囚われた男たちを見捨てる大陸の部に乗り空へ。天空の島ハイパーティアの誕生。

1万年前

僅かに生き残った男たち、現生人類と共存。混血化が進み、後の世に多く超人が誕生する萌芽となる。史上初の地球外からの侵略。侵略者、ヒトゲノム改造ウイルスを使用。中国夏王朝において初の人造ヒーロー「ナタク」と「ゴクウ」が完成、これを殲滅。

紀元前2000年

トロイア文明を異星生物兵器「ヒトフ」が襲撃。「旅人」を名乗るハイパーティア人姉妹が別の異星人兵器「アウス」の助力を得て撃滅。メソポタミア・シュメール王朝にスーパーヒーローとして初の統治者ギルガメッシュが即位。

同時期

ハイパーティア、地上との国交を断絶。古代バビロニアにジャガーの頭を持つスーパーヒーローが登場。後にこの地域における「豹頭の英雄」の原型とされる。

紀元前1500年

エジプトに「アラオ」を名乗るヒーロー出現。邪神バディオスと呼ばれる超進化生命体に勝利するも消滅。以後同地域では王をアラオと称する事に。

同時期

日本では初の異星人ヒーローが現れる。その姿を模して遮光機士偶が作られる。

同時期

ヒット文明に超天才オミュータント出現。蒸気文明を作り上げるが異星人に滅ぼされる。

紀元前1300年

アラオ、モーゼを名乗りエジプトからのユダヤ人脱出に寄与。

紀元前1200年

ミケーネ文明、「ヒトフ」の細胞が賦活して改良再生された「ヘイル」によって滅ぼされる。

紀元前756年

ギリシャにおいて「旅人」姉妹、ゼウスらヒーロー軍団と戦争手前になりかけるも、賢者ヘパイストスの提案により体力ゲームで決着をつけることとなり、これがオリンピックの原型となる。

1940年7月 バトルオブブリテン。空飛ぶヒーロー、ユニオン・ジャックが英空軍を率い、ドイツ空軍騎兵部隊を打ち破る。  
1943年 ホロコースト激化。12代目スカーレット・ピンパネル、ナチに追われるユダヤ人達を次々救出。  
2月 プライベート・フリーダム「ガンナーサイド作戦」に従事、米軍特殊部隊と共にナチスの原爆計画を阻止。

1943年9月 メールシュトロム、グラン・サツソ襲撃に参加。ムツソリーを救出。  
1944年6月 ノルマンディー上陸作戦にて両陣営のヒーローが激突。多くの犠牲性を出す。  
8月 パリ解放。勝利の影に13代目スカーレット・ピンパネルの活躍。  
1945年3月 イヌガミ、南方の戦線が消息不明。  
8月 シラヌイ、原爆投下を阻止せんとするも力及ばず、広島街と共に消滅。日本人ヒーロー全滅。

1946年10月 ユルンベルク裁判結審。メールシュトロムを始めとする枢軸国側のヒーローの多くがヴィランとして裁かれる。  
ペーパークリップ作戦実施。ナチの人造超人計画に協力した科学者達の多くがアメリカへ。  
1947年 ニューワールドオーダー計画(後のMKアルティマ計画)準備段階へ。  
1949年 プライベート・フリーダム突然の引退。以後完全に消息を絶つ。  
1951年 中国内戦で共産党に敗れた国民党が台湾に脱出。混乱に乗じた日本人ヴィラン怪盗嵐天が故宮の宝物を大量に強奪。

1958年 愛国的ヒーローの有志連合アメリカン・アレシアンズが非米活動委員会に協力し、アメリカ国内の共産主義者を「見なされた人々」を多数摘発。  
1960年代 戦後初の公式日本ヒーロー「十六夜仮面登場」。  
1962年10月 東西冷戦激化。ヒーロー両陣営に別れて敵対。第二次大戦の悲劇再び。キューバ危機。フォーチュンソルジャー&ワイルドジャスティス、ロシアの改造人間ブレノーク・パトリオータと激突。  
1963年8月 トンキン湾事件。ベトナム戦争開戦。  
1968年3月 フォーチュンソルジャー前線へ。

1974年 米兵の民間人虐殺にフォーチュンソルジャー関与の疑い。  
1975年4月 ワイルドジャスティス、アメリカ政府と軍を批判、自ら反逆者を名乗る。  
1976年 イヌガミ、南方の島のジャングルで生存が確認され日本に帰国。  
1978年1月 フォーチュンソルジャーとワイルドジャスティス激突。共に行方不明。  
1980年代 ベトナム戦争終結。  
1984年 イヌガミ、ヴィランとして跳梁。十六夜仮面と戦い死亡。  
1984年 十六夜仮面、正体を明かし消息を絶つ。  
1994年 ゼノビア誕生。  
MKアルティマ計画の被験者となる。

1994年 ニューワールドオーダー計画がMKアルティマ計画と名称変更して本格稼働。  
1994年 反資本主義ヴィラン・ルドラの破壊工作により、インドのポパールにある米企業の化学工場から有毒ガスが流出し、延べ一万人を超える周辺住民が死亡。  
1994年 ゼノビア8歳。8番目の力に覚醒後、ハイパーティアを出奔。

1994年 MKアルティマ計画の被験者となる。

紀元前722年 中国では春秋時代開始。「伝説の武将」と呼ばれる超人たちの激突が各地で記録される。

紀元前200年 マダガスカル島にて、カバに擬装していた異星人の侵略が阻止され、彼らは全真地球より逃亡。以後マダガスカルにカバはいなくなる。

西暦元年 イース・キリスト誕生。

100年前後 インドで「ゼロ」の概念が発見。異次元人「プロイウル」がこれを奪いに来るが、インドの超人「ラーマ・ヤナ」に撃退。

1189年 「異星人の侵略基地がエルサレムにある」として第二次十字軍遠征。「アラ」の使者を始めとするイスラムヒーロー達に撃退される。

1200年代 北宋にて封印されたヒトゲノム改造ウイルスが解放、10000人以上の罹患者が闘争本能の赴くままに殺し合う事態に。

数千年ぶりに「ゴクウ」と「ナタク」発動。罹患者を殲滅。後に「水滸伝」としてまとめられる。

1501年・同時期 イングランドの某辺境にて「吸血鬼」騒動。

1524年 フランク地方で「獣」と呼ばれるミュータントが出没、討伐部隊が組織されるも敗北、領主の首を噛み千切った後「獣」は忽然と姿を消す。

モホーク族のヒーロー「遠くの星から来た男」が、白人の侵略に対抗してネイティブ・アメリカンの大部族同盟を糾合するが、天然痘の大流行のため瓦解。

1570年代 キヤプテン・グランパス、エリザベス一世より私掠免許状を授与されスペイン幽霊海賊船艦隊と戦う。

1755年 ポルトガル王国の首都リスボンが大地震と津波により崩壊。

ポルトガルのレアオン・デ・シエモスを中心とする欧州のヒーローたちが被災者の救出に尽力。

1792年4月 フランス革命戦争勃発。義賊スカレット・ピンパネル、革命政府に追われる貴族達を次々救出。

1830年代 アメリカ初の黒人ヒーロー「ポラースター」、「地下鉄道(黒人奴隷逃亡者C.L.D.ジョンの妄想から生まれたヒロイン、アリス・リデル)数字者C.L.D.ジョンの妄想から生まれたヒロイン、アリス・リデル」

1862年 人の夢に巣食う夢魔ハートのクインと戦い、多くの少女達を救う。

1857年 大英帝国のヒーロー、サンダーチャイルドがインド大反乱で反乱軍に制圧された「アリー」を奪還、多くの英国人を救出。

1877年 箱館に仮面の剣士壬生狼(ミブロ)とヒメガミ出現。列強各国の妖人エー・ジェントと戦う。

1906年 拳法使いのヒーロー「無影脚」、香港に逗留中の孫文を清朝の暗殺組織から守る。

1912年 無影脚、辛亥革命に参加し戦死。

1917年 ペドウィン出身のヒーロー「ハイダル・マリク、T.E.ロレンスとともにオスマン帝国のアラブ侵攻と戦う。

1935年 カナダのハリファックス港で、ノーザンスターとヴィランの戦闘に巻き込まれた船の積み荷が爆発。約3000人が死亡し、周辺地域が壊滅。大日本帝国陸軍所属のヒーロー、イヌガミとシラヌイ、上海租借地にて諜報活動を展開。

1939年9月 第二次世界大戦勃発。多くのヒーローが枢軸国、連合国両陣営に別れて敵対する事に。

1995年 超人犯罪組織プロウジョブ、スーパーヴィランを糾合して破壊活動開始。

1996年 アテナ17歳。ハイパーリアより降臨。エイズワンダーとしてヒロインデビュー。

1996年 スターゲイザー、エネルギー生命体として地球に降り立つ。

1997年5月 アテナ19歳。B.M.ザ・シニーターと結婚。

1998年1月 プロウジョブ東京空爆作戦決行。B.M.作戦を阻止し死亡。プロウジョブ壊滅。

1998年4月 ゼノビア22歳。ポイントブランクを救出。

1999年3月 アテナ20歳。クララを救出。エイズワンダー最初の引退。

1999年7月 英国にて巨大ミュータント「グレンデル」出現。

初代メンバー造反の末、壊滅。

2002年 日本政府、国内におけるMKアルティマ計画の全手を破棄。リリ誕生。

2001年 MKアルティマ計画事実上の瓦解。

2003年4月 謎の巨大薬物密売組織誕生。全世界規模の麻薬戦争勃発。

2004年 サエグサ市にミス・マーベリック出現。ディアブロンナと激戦を展開。

2004年 スターゲイザー、ゲイザーガールと結婚。全世界から祝福を受ける。

2004年 リリ、イギリス政府により回収。M.I.X.2度目の壊滅。

2005年1月 星マイケル(スーパーノヴァ)誕生。

巨大薬物密売組織解体。理由は不明。

2015年1月 プロウジョブ復活。

2015年3月 クララ17歳。2代目エイズワンダーとしてデビュー。

2015年4月 アテナ37歳。初代エイズワンダーとして復活。

2015年6月 プロウジョブ東京占領。

2015年12月 WEイズワンダーによる東京解放。プロウジョブ2度目の壊滅。

サクリファイイス全世界に向け宣戦布告。

2016年3月 北海油田基地「シエファ」消滅。M.I.X.メンバー行方不明に。

グレンデル再び出現。ヒーロー連合取り逃がす。スターゲイザー重傷を負う。

2017年1月 南洋にてM.I.X.チーム発見。国連指揮下のグレンデル追尾選任チームとなる。

アテナ38歳。セララを救出。

2017年9月 リリ・トゥリガー、グレンデルの能力を沈静化。

M.I.X. MKアルティマ最後の推進者を撃破。

2代目エイズワンダー、聖すみれ学院高校に美食う旧支配者をハニー・ザ・ハガーらと共に撃破。

真鍋エリカ(ミス・マーベリック)Q荒野と結婚。娘マリカを授かる。

2023年1月 セアラの能力暴走。居合わせたアテナ、アルテミス、時間流に投げ込まれ、紀元前2500年のトロリアへ。以後様々な時代を彷徨い帰還。

2028年4月 クララ25歳。2代目エイズワンダー引退。

ハイパーリアの女王に即位。地上から去る。

2028年9月 セアラ12歳。3代目エイズワンダーとしてデビュー。

ランゴリアーズの地球侵略開始。

アテナ50歳。初代エイズワンダー二度目の復活。

2700年代 ポイントブランク人類壊滅後の世界に出現。

歴史を改変するため活動開始。



# あとがき

## 環望

この同人誌は私が少年画報社刊「月刊ヤングコミック」にて連載させて頂いたちよいエロヒロインコミック「ウチのムスメに手を出すな！～母娘ヒロイン奮闘す～」の公式同人誌第6弾です。

今年の春から始まった新連載のあおりを受けて少々薄めとなりましたが、いつもの執筆陣に加え、新しい作家さん方のご協力を得て充実した内容となりました。

我が心の師近藤ゆたか先生と粉味先生のご夫妻はウチムス連載時から応援してくださって今回の依頼にも快く応じてくださいました。このお二人に描いていただけたのは！

アレグロさんはウチムス最終回のヒーロー・ヴィランコンテストに応募していただいたのがきっかけで、今回お願いしました。大人の女体を描くのがうまいんです！本当。

琴吹かづきさんはもう十数年来の戦友です。アメコミ好き、熟女好きというのもあってなんで今まで原稿頼まなかったん？って感じ（笑）今回満を持しての登場でした。みなさんありがとうございます！

現在ヤンキンアワーズGHで連載中の「ソウルリキッドチェインバズ」が意外と作画に手こずる作品ということもあって、あまり同人誌に時間が取れない状況となりつつありますが、できる限りウチムスは描き続けていきたいと思っております。

追記 今回も巻末にウチムス年表なるものが掲載されています。神野オキナ先生とティクララン君の協力の元にかかれてこの年表、実は前回の同人誌の物より書き足されています。今後もチマチマ改稿していこうと思います。よかったら読んでください。

## Gemma

エイスワンダー、ミス・マーベリック、リリィ・トゥリガーというウチムス・ユニバースの三大ヒロインが共闘する豪勢なお話と、女子六人がどーでもい話をするだけのゆるーい日常話、今回は二本書かせていただきました。

メインの長編と付け合わせの小話という構成がなんとなく往年の大長編ドラえもんみただなと書きながら思ったものです。

いつか御本人の漫画でも、三大ヒロインの共闘が描かれるのを楽しみにしています。

ほらあれだ、

『スターフィッシュ・セイレーンズ』

みたいな感じで。

タカスギコウさんが  
アクションビザッツで連載されている  
「レディ・フローラル」！  
アテナと違ってスレてない（笑）とこが  
最高です！

## MILF of STEEL FOREVER

### 環屋

編集人 環望 (Twitterアカウント@tamakinozomu)

連絡先 tamakiya66@yahoo.co.jp

執筆者 環望 Gemma ティクララン 富士原昌幸

発行日 2016年8月14日

印刷所 POPLS



ウチのムスメに手を出すな！公式同人誌

# MILF of STEEL

ミルフオブスティール

# FOREVER

フォーエバー

TAMAKI NOZOMU  
PRESENTS

## SPECIAL GUESTS

ブッチャーU

もっちー

ナッピー

タカスギコウ

チバトシロウ

ICE

迂闊十臓

ささきタツヤ

おおくぼマタギ

アレグロ

琴吹かづき

近藤ゆたか

ちばこなみ

かのえゆうし

神野オキナ

富士原昌幸

GEMMA

ティクラクラン

環望

2016 SUMMER

環屋

